ISSN 0919-7931

IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報　No. 202，2025

***VIEW*　展望**
『第 9 女収容所』から考える／平野 共余子…2

***INFORMATION*　学会組織活動報告**
研究企画委員会…3　機関誌編集委員会…3　映画文献資料研究会…4-5
アナログメディア研究会…6-11　アジア映画研究会…11-13　写真研究会…13-14
映像人類学研究会…14-16　メディア考古学研究会…17-18
映像玩具の科学研究会…19-20　中部支部…20-21　西部支部…21
日本映像学会第 51 回全国大会第二通信…22-23

FROM THE EDITORS
編集後記…23

「Image Arts and Sciences ／日本映像学会報第 202 号」2025 年 2 月 1 日発行
発行人：黒岩俊哉　編集担当／総務委員会（常石史子・藤井仁子・北市記子）
日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘 2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内
e-mail：office@jasias.jp　https://jasias.jp/

日本映像学会

『第９女収容所』から考える

平野 共余子

ユーゴスラヴィア（以下ユーゴ）という国がバルカン半島に存在していた時、1976年秋から翌春まで私は首都ベオグラードの演劇映画アカデミーに留学した。ユーゴ映画研究目的の政府給費奨学生として、午前中はセルビア・クロアチア語の学校に通い、午後は自由研究に自分で取り組み、指導教官のペタル・ヴォルク先生と時々会うという生活だった。ビデオ以前の時代で、先生の手配でユーゴ映画史で重要な作品20数本の35ミリを郊外の撮影所の試写室で見ることが出来、多分私は日本人として初めてドュシャン・マカヴェイエフの初期の映画などに触れた。

その後私はアメリカに留学・就職後にユーゴは解体した。そして2010年、東京の大学で授業の一環として、旧ユーゴ地域の新旧映画上映活動を歴史や地域研究者と共に「シネマ・（ポスト）ユーゴ」として始めた。上映前に専門家が題材の歴史的・文化的背景の解説を、上映後は討論を行なった。監督や製作者と学生との討論参加がスカイプで実現したのは日本では当時珍しかったが、コロナ期を経て関係者の遠隔参加もズームで日常的なものとなった。

2022年に修復を経てスロヴェニアのテレビ局で放映されたユーゴ時代の映画*Deveti Krug*（1960）が英語字幕付きでYouTubeで公開され、シネマ・（ポスト）ユーゴでも上映した。本作の舞台はナチス・ドイツの占領下となった1940年代初頭のクロアチアで、反ユダヤ主義が日常生活で進行する様子を見せる。ユダヤ系の友人の娘を救うために両親から結婚を強いられたカトリックの青年が当初は反発するものの次第に彼女を愛するようになり、収容所に送られた妻を救うために奔走する。原題は「第九圏」という意味で、ダンテの『神曲』の地獄の最低層を指すので、我々の上映では『地獄』という日本語題名にした。第九圏が何か知らなかった私は、当時のユーゴ観客の文学的素養の高さに感じ入った。また映画の末尾で、若くて美しい囚人を集めた収容所の一画を「第九圏」と呼ぶという台詞が出てくるので、戦時を生き延びた観客は題名から映画の内容が予想できたかもしれない。

本作はスロヴェニア出身のフランツエ・シュティグリツ監督の長編7作目だが、同監督の1956年の『平和の谷』は2年後、日本で公開された最初のユーゴ映画となった。第二次世界大戦中ユーゴの山中に不時着したアメリカ軍の黒人パイロットが、スロヴェニアの少年、ドイツの少女と共に戦火の中を生き延びる姿を描く作品で、主演のジョン・キッツミラーがカンヌ映画祭で男優賞を受賞した。

オンラインでリサーチをしていた私は、『第9女収容所』という日本語のポスターに遭遇した。本作が当時日本で劇場公開されていたことはこの時初めて知ったが、題名から見ると際物扱いの可能性もあるものの、苦肉の翻訳であったのかもしれない。当時日本の映画雑誌では『キネマ旬報』1962年1月新年特別号で小倉真美が、『映画芸術』 同年1月号で田山力哉が評を書いている。メロドラマ的要素もあるがヒロインの悲劇を盛り上げていく細かな演出とヒューマニズムに訴える反戦のモチーフを二人とも称賛している。ストーリーを視覚的・聴覚的に見せていく手法、ドイツ軍よりもクロアチア人のナチス協力者と反対者を描いていることなどが私にも興味深かった。

国立映画アーカイブ図書館でリサーチをしていると、最近組合関係の倉庫で本作の16ミリが見つかったことを司書の笹沼真理子氏が教えて下さった。ユーゴは日本の社会党と関係が深く、ベオグラードには社会党から派遣された留学生も来ていた。社会党系の組合で文化活動の一環として、本作を全国で巡回上映していたのかもしれない。

日本でそれまで劇場公開されていたユーゴ映画では、『ネレトバの戦い』（1969年、日本公開同年）や『風雪の太陽』（1973年、日本公開同年）のように、圧倒的に優位なドイツ軍に挑むユーゴのパルチザン戦を、国際的スターを迎えて大スペクタクルとして見せるジャンルが有名である。それ以前の日本で中級規模のパルチザン映画が戦争アクション映画として数本公開されていたことも、この時に雑誌のリサーチを通じて知った。

日本で公開された東欧のホロコースト映画には、ポーランドの『アウシュヴィッツの女囚』（1948年、日本公開1955年、再公開1988年）、『パサジェルカ』（1963年、日本公開1964年）、ユーゴ・イタリア・フランス合作のユーゴで撮影された『ゼロ地帯』（1960年、日本公開1961年）があるが、最近ではハンガリーの『サウルの息子』（2015年、日本公開同年）が記憶に新しい。いずれもさまざまな収容所の体験を映像化したものだ。日本未公開作品では、第二次世界大戦が迫るクロアチアを舞台に、クロアチア人、ユダヤ系、ファシスト党に参加したイタリア系の三人の青年たちを描くユーゴ映画『26の絵の中の占領』（1978年）もある。

ハリウッドのホロコースト映画『シンドラーのリスト』（1993年）を集団学習として映画館に観に行ったカリフォルニアの高校生が起こした事件のことも、私は上映会で紹介した。収容所でドイツ兵がユダヤ人を銃殺する場面で笑いが起こり、怒った一般観客の訴えで劇場主が映写を中断し、生徒たちへ退去を命じて社会問題になったのだ。この事件はホロコーストの風化を象徴するものとも論じられたが、事件が起こった1944年初頭の報道（註1）によれば、多様な背景があったようだ。黒人やヒスパニック系の多いその高校で、教師は黒人の市民権運動運動家、マーティン・ルーサー・キング生誕記念日と本作を関連づけることを画していたが、事前に予習が行われていなかった。大部分モノクロで3時間15分の上映時間と知って興味を失い、上映中にロビーでたむろしている生徒もいれば、銃殺された女囚の不自然な倒れ方に笑ったのだと主張する生徒もいた。生徒には悪気がなかったのに不当に差別されたと黒人たちは憤り、ユダヤ系の劇場主は反ユダヤ主義ではなく単に劇場マナーの問題として本件を扱ったのに、メディアが事を大きくしたと主張。スティーブン・スピルバーグ監督は昨今の若者が暴力に無感覚になっていることにむしろ注目し、3ヶ月後にこの高校を訪れ映画を通じた差別撤廃の事業立ち上げの宣言をした。

同時にホロコーストが我々の間で忘却の彼方の出来事になって行く側面は否定できないだろう。セルゲイ・ロズニツァ監督の『アウステルリッツ』（2016年、日本公開2020年）で観光地化した元収容所を訪れる現在の人々が、ふざけた言語が書かれたTシャツやくだけた服装でスマホ撮影に余念なく、死者に対する厳粛な敬意を欠く態度に私は衝撃を受けたのである。

註1　*Chicago Tribune*, January. 25, 1994; *The Washington Post,* March 9, 1994; *Los Angeles Times*, April 12, 1994.

（ひらの きょうこ／映画史、東欧映画）

研究企画委員会

中村 聡史

2024年6月から第26期研究企画委員会の委員長を拝命いたしました。佐藤由紀副委員長をはじめ、第26期研究企画委員の方々とともに、前25期研究企画委員会の方針を踏襲し、引き続き、よりよい学会運営のために尽力していきたいと思います。

前25期研究企画委員会からのことになりますが、2024年度新規研究会登録（春期・秋期の年2回募集）について、5月開催の研究企画委員会および理事会にて春期の申請1件が承認され、「映像身体論研究会」が新たに本学会に加わりました。秋期募集に関しては申請がなく、2024年度の新規研究会登録は1件となります。

また、2024年度の研究会活動費助成は、春期に8件の申請があり、これらも5月開催の研究企画委員会、理事会にてすべて承認されました。この8件で、2024年度の活動費助成にかかる予算枠はすべて埋まりましたので、秋期の募集は行いませんでした。

次年度も今年度と同じく年2回、新規研究会登録と研究会活動費助成の募集を行う予定です（※ただし、活動費助成は予算の関係で年1回になる場合があります）。本学会における、より活発な研究会活動のためにも、積極的に申請していただくようお願い申しあげます。

日本映像学会第51回大会の発表申込期日が迫っております。例年、研究企画委員会では、理事会からの依頼により、発表申込についての予備審査を行います。公正かつ適切な審査実施のためにも、申し込まれる会員のみなさまには申込方法ならびに期限の厳守をお願い申しあげます。

会員諸氏におかれましては、各支部活動や研究会活動、また大会への参加や発表等、活発に活動をされております。研究企画委員会では、みなさまの研究活動を適切に支援することができるよう、今後も厳正な審査とルールの運用を心がけてまいります。

（なかむら さとし／研究企画委員会委員長、日中文化芸術学院）

機関誌編集委員会

木下 千花

『映像学』第113号について

1. 編集体制
青山太郎（名古屋文理大学）、東志保（大阪大学）、岡田秀則（国立映画アーカイブ）、小川順子（中部大学）、川崎公平（北海道大学）、韓燕麗（東京大学）、菅野優香（同志社大学）、木下千花（京都大学、委員長）、倉石信乃（明治大学）、角井誠（早稲田大学、副委員長）、渡邉大輔（跡見学園女子大学）

2. 概要の報告と今後の予定
論文7本（採択率：33.3%）、書評5本掲載決定
9/14 締切: 投稿論文22篇（うち1本不受理）、研究報告1本
12/23 最終入稿、2/7/2025 校了、2/22/2025 発送（予定）

3. 委員会の開催
9/19 第1回編集委員会（Zoom）
10/28 第2回編集委員会（Zoom）
12/13-16 第3回編集委員会（メール稟議および臨時Zoom会議）

4. 書評について
書評担当：角井誠（副委員長）、川崎公平、渡邉大輔
博士論文の書籍化を中心に、学会員の著作下記 5 本と書評者を選んで依頼、学会誌掲載の書評としての適切性を確認する査読を行い、全5本の掲載を決定。
福島可奈子『混淆する戦前の映像文化　幻燈・玩具映画・小型映画』（思文閣出版、2022）：大久保遼
真鍋公希『円谷英二の卓越化　特撮の社会学』（ナカニシヤ出版、2023）：坂口将史
丸山友美『日本の初期テレビドキュメンタリー史』（青弓社、2023）：北浦寛之
鷲谷花『姫とホモソーシャル　半信半疑のフェミニズム映画批評』（青土社、2022）：徐玉
河野真理江『メロドラマの想像力』（青土社、2023）：小川佐和子

（きのした ちか／機関誌編集委員長、京都大学）

映画文献資料研究会

西村 安弘

2024年11月30日（土）13：30～17：00、東京工芸大学芸術学部1号館B1大講義室にて、第57回映画文献資料研究会（科研費若手研究「冷戦下東アジアにおける〈ポスト帝国〉の越境的映画人ネットワーク」（課題番号：23K12048）研究代表　丁智恵　との共催）を以下のように開催した。

シンポジウム『大島渚の韓国』

企画主旨：松竹ヌーヴェル・ヴァーグ、創造社とATGの共作、『愛のコリーダ』（1976）裁判、『戦場のメリークリスマス』（1983）の国際的成功など、日本映画史における大島渚（1932～2013）の軌跡は、これまで様々な切り口で語られて来ました。2021年12月に出版された、大島渚プロダクション監修、樋口尚文編著の『大島渚全映画秘蔵資料集成』は、今後の大島渚の作家研究の礎石となるだけなく、日本映画史研究にとっても里程標となることでしょう。

征韓論で知られる対馬藩士・大島友之允を先祖とする大島渚は、韓国・朝鮮に最も強い関心を寄せた日本の映画人です。『夏の妹』（1972）で沖縄返還を題材にした大島は、しかしながら、沖縄よりも寧ろ韓国・朝鮮を好んで取り上げたように見えます。ポスト植民地主義の立場から、大島の描いた韓国・朝鮮にアプローチすることは、日本映画史の研究を比較映画史へ繋げることにもなります。

「大島渚の韓国」と題した今回のシンポジウムでは、日本と韓国の両方の立場から、改めて大島渚の作品に現れた韓国・朝鮮の表象についての再考を試みた。

○第1部：基調講演「大島渚と韓国」

発表者：卜煥模(ボク・ファンモ)、韓国湖南大学校映像公演学科元教授（1996年3月～2023年8月）。韓国漢陽大学校演劇映画学科卒業。早稲田大学大学院文学研究科修士・博士号（演劇映像学専攻）取得。主な論文：「成瀬巳喜男作品の様式」、「韓国映画史初期における伊藤博文の映画利用に関する研究」。著書：『朝鮮総督府のプロパガンダ』（2023）。

発表概要

第1部　韓国人の表象―大島監督は韓国人をどのように表現したのか

１．日本映画の中の韓国人（在日韓国人、在日朝鮮人、朝鮮人を含む）

戦前から60年代までの映画

『有がたうさん』（1935）　天城峠を越える韓国人労働者の群れ

『望楼の決死隊』（1943）　日本警備隊員と韓国人が一致団結

『若き姿』（1943）　皇軍になるための訓練を受ける韓国少年達

『にあんちゃん』（1959）　貧困と差別

『あれが港の灯だ』（1961）　民族的差別

『キューポラのある街』（1962）　貧しいながらも明るく生きる在日家族

―貧困、差別、民族的アイデンティティの喪失と葛藤、同情の対象

２．大島渚の映画と韓国人

『青春残酷物語』（1960）　韓国4.19学生革命のニュース映画挿入

『太陽の墓場』（1960）　釜ヶ崎のドヤ街で貧しい生活をする韓国人

『忘れられた皇軍』（1963）　韓国人の表現が画期的に変化、国家権力の不条理に抵抗、作品の当事者、日本人の鏡としての韓国人を描写、韓国·韓国人に関心を向け、それ以後多数の関連作品を制作

『青春の碑』（1964）　4.19革命で片腕を失って売春婦になった女性と更生院の物語

『ユンボギの日記』（1965）　貧しい少年ユンボギの日記を映画化

『日本春歌考』（1967）「騎馬民族征服王朝説」、「満鉄小唄」を歌う韓国女学生

『絞死刑』（1968）　韓国青年の死刑執行を通じて国家の不条理を批判

『帰って来たヨッパライ』（1968）　日本に密航した韓国軍人と学生が処刑される

韓国人関連の作品が多い理由

大島スタイルのテーマに適合―国家権力への抵抗、不条理な社会現状への批判、疎外と差別、革命のエネルギー、貧困と希望、貧しい少年の強い意志など韓国に対する個人的な関心―'自分は体質的に韓国が好きだ'、'家系が対馬藩出身で韓国から近い'、スタッフに多数の在日韓国人映画人を起用

韓国社会（1960年代）に対する共感―'日本の敗戦直後の状況と類似'、'民族の分裂と動乱の傷痕を深く理解'、'日本の失われた原点みたいなものが韓国にある'

３．『忘れられた皇軍』から見る韓国人の表現

当事者として抵抗する韓国人を表現

―クロース・アップによって強力で衝撃的イメージを創出、火傷による傷だらけの顔、目の無い顔の正面、切断された右腕などを観客が直視せざるを得ない視点

―主人公の訴える主観ショット

―ロング・テイク画面によって実在感を強調、国会議事堂のデモ隊の場面、国権の最高機関である国会議事堂とデモ隊の画面構成で国家の不条理への抵抗を表現

４．韓国人の表象の流れ

―韓国の学生革命のエネルギー、―貧困、どん底からの愛と希望、―国家、社会の不条理に対する抵抗、―反戦、社会改革の象徴、―日本人の鏡、'日本人は自分自身の姿をよく知らないが、韓国人という鏡を置いてみるとその姿がわかる'

第2部　韓国国内における大島渚―マスコミでの紹介と映画の受容

1.　マスコミでの紹介

―「日本のヌーベルバーグ映画作家に警告する」京郷新聞 1960.12.4

『太陽の墓場』韓国人の否定的設定は韓国を侮辱している

―「日本前衛作家大島渚氏訪韓」京郷新聞 1964.8.29　李承晩ライン撮影のための訪韓

―「大島渚，日本の前衛派監督大島渚氏の韓国映画及び俳優論」朝鮮日報1964.10.6韓国映画の演技、録音、検閲、国際化と外国文化の開放などについて特別寄稿

―「僕が見た韓国」朝日新聞寄稿文を紹介、東亞日報 1964.12.10　韓国の復興状況、韓国人の強い国家意識と対日感情に驚くが個人的には親密感

―「朝鮮総連で逆利用」京郷新聞 1965.12.21　『ユンボギの日記』に対する誤解、朝鮮総連が翻訳、左派監督が演出、貧しい韓国を宣伝している

―『愛のコリーダ』外国のマスコミ引用、タイトル『사랑(愛)の闘牛』、『感覚の帝国』、猥褻問題の作品

―海上大討論『玄界灘新しい道』KBS TV、テレビ朝日共同主催、両国の文化有識人による日韓船上討論会、過去の歴史、対日感情の論争に不快感吐露

韓国のマスコミにおける大島のイメージ（60年代）

―日本映画の新しい波の旗手、前衛的監督、巨匠、韓国に友好的、肯定的

2.　映画の受容

―日本映画の開放前に非公式上映（ビデオ）『日本の夜と霧』、『愛のコリーダ』等を1990年代ソウルの大学校内で上映

―第7回釜山国際映画祭特別展　2002.11　'大島渚：韓国との縁'、『ユンボギの日記』、『日本春歌考』、『絞死刑』、『帰って来たヨッパライ』、『愛の亡霊』

：松竹ヌーベルバーグの出発点、新しい波、伝統から脱皮、日本社会と政治の矛盾との闘争、現実を批判、革新的な監督と評価
― ソウルアートシネマ（日本国際交流基金後援）、大島渚回顧展　2003.1 ‘禁忌と抵抗’『青春残酷物語』、『日本の夜と霧』等12本を紹介
：軍国主義の日本国家と社会、検閲を強く批判、知識人として日本映画界を主導する前衛監督、禁忌と抵抗のイメージと紹介
―シネマテーク釜山（日本国際交流基金後援）松竹ヌーベルバーグ特別展 2005.1‘若さ、政治、暴力、性―反逆の年代記’、大島渚、吉田喜重、篠田正弘の代表作
― 韓国シネマテーク協議会（日本国際交流基金）大島渚回顧展　2010.7『青春残酷物語』、『絞死刑』、『愛のコリーダ』、『愛の亡霊』、『御法度』 等22本を紹介
― ソウル文化センター（韓国映像資料院、日本国際交流基金後援）大島渚追慕特別展　2013.3『愛と希望の街』、『帰って来たヨッパライ』等10本
―　文化芸術の殿堂　　アートナイン(日本国際交流基金)JAPAN MOVIE FESTIVAL　2023.3‘愛の起源’大島渚『愛のコリーダ』、 岩井俊二『Love Letter』等
―劇場上映
『愛のコリーダ』を『感覚の帝国』の題名で2000年4月に上映、観客14万人
：社会変革に失敗した日本知識人たちの無力感を表現、禁忌への挑戦、ポルノグラフィなどとの評判
『御法度』2004年4月8,789人：軍国主義への痛烈な批判、野心の無い平凡な映画
3.　韓国国内における大島の評価
―前衛的、日本のヌーベルバーグの旗手
―禁忌への挑戦、不条理への抵抗
―世界的巨匠
―早くから韓国に関心の高い監督
―日韓協定以前から交流、友好、相互理解を促進

○第2部：
パネラー報告（１）「大島渚の‘テレビ’と韓国と‘私’」
報告者：丁智恵、東京工芸大学准教授。専門はメディア史、在日コリアン研究。主な論文：「歴史の忘却と抵抗の痕：1960年代社会派ドラマの放送中止事件から」浅野豊美編『和解学叢書6 文化・記憶 想起する文化をめぐる記憶の軋轢：メディアの和解と行方』（2023、明石書店）、「朝鮮戦争報道と占領期日本――映像メディアの分析を中心に」蘭信三ほか編『帝国のはざまを生きる：交錯する国境、人の移動、アイデンティティ』（2022、みずき書林）など。
報告（１）：「大島渚の‘テレビ’と韓国と‘私’」は、卜煥模氏の基調講演を受け、60年代の映像メディアにおいて韓国はどのように描かれていたのか、大島渚監督の作品は後世のテレビ制作者や在日コリアンの作り手、さらに戦後日本のテレビなどにおける韓国表象に対してどのような影響を与えたのかという点についてポスト植民地主義の視点から検討し、この時期の作品における‘私’を主語とした語りの意義について考察を行った。大島渚とテレビについて考察する際に最も重要な人物が元日本テレビの牛山純一である。牛山はテレビにおける署名性の大事さを訴え、61年に民放初のドキュメンタリー番組『ノンフィクション劇場』を立ち上げ、市川崑や新藤兼人、羽仁進、野田真吉など映画監督がテレビドキュメンタリーに参加することを実現した。60年代の韓国をめぐる表象を検討するにあたり重要な出来事には小松川事件（1958）、金嬉老事件（1968）、ベトナム反戦運動と韓国人脱走兵（60年代後半）がある。大島は韓国人密航問題が登場する『帰ってきたヨッパライ』（1968）や、小松川事件の李珍宇少年をモデルとした『絞死刑』（1968）などを通してこれらの問題を独自の視点で描いた。作品には大島渚監督自らの姿や声が登場しており、監督は「映画のもってる主観性」を強めることを意識し、作品を通して「自分自身を曝したい欲望」を表現したと考えられる（大島渚『大島渚1968』（2004）pp61-63）。さらに大島渚は在日コリアンとの交流も深く、交友・師弟関係のあった作り手たちは、のちに在日というテーマについて鋭い問題意識を提示した映画監督となった（『解放の日まで』（1986）などで知られる辛基秀、『戦後在日五〇年史　在日』（1997）で知られる呉徳洙、『月はどっちに出ている』（1993）で在日表象の常識を覆し、『血と骨』（2004）で日本アカデミー賞最優秀監督賞を受賞した崔洋一など）。大島渚と韓国との関わりについて、彼のフィルモグラフィーと人的ネットワークの双方からアプローチすることで、その後半世紀以上にわたる日本における韓国表象の変遷を辿る際に、重要な問題意識の礎を築いていたことが見えてきた。
パネラー報告（２）
報告者：大島新、東京工芸大学教授、ドキュメンタリー監督・プロデューサー。1995年フジテレビ入社、1999年同退社。2009年映像制作会社ネツゲン設立。監督作品：『なぜ君は総理大臣になれないのか』（2020）、『香川一区』（2022）、『国葬の日』（2023）。プロデュース作品：『ぼけますから、よろしくお願いします。』（2018）、『私のはなし　部落のはなし』（2022）、『うんこと死体の復権』（2024）。著書：『ドキュメンタリーの舞台裏』（2022）。
報告（２）：大島渚の私生活における韓国とドキュメンタリーの技法という2点について、報告された。妻の小山明子の証言として、理由は明らかではないが、大島渚はとにかく韓国が好きだったという。京都の学生時代から、在日コリアンの友人もあったし、尼崎の焼肉店を贔屓として家族ぐるみの交流もあった。映画のスタッフとしても、崔洋一を始め、在日コリアンを重用した。
　ドキュメンタリー映画『忘れられた皇軍』では、障害者の顔を捉えた超クロース・アップの多用が際立っていた。また、国会議事堂の前を傷痍軍人たちが行進するロング・テイクは、当時のゼンマイ式の16ミリ・カメラで撮影の限界に近い40秒を有効に使っていることからも、大島の演出があったことが伺われるだろう。
進行：西村安弘：東京工芸大学教授。

（にしむら やすひろ／映画文献資料研究会代表、東京工芸大学）

アナログメディア研究会

太田 曜

以下開催順に

● 3月31日　実験映画を観る会VOL-8　伊藤隆介特集　研究会主催　8ミリフィルム小金井街道プロジェクトとの共同主催

● 5月19日　実験映画を観る会VOL-9　関根博之特集　研究会主催　8ミリフィルム小金井街道プロジェクトとの共同主催

● 6月23日　小池照男　作品上映　研究会協力企画

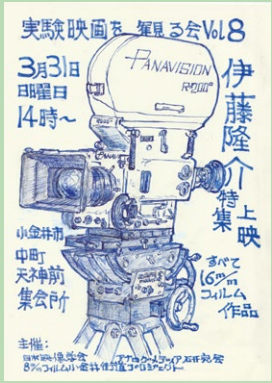
● 7月14日　実験映画を観る会VOL-10奥山順市特集　研究会主催　8ミリフィルム小金井街道プロジェクトとの共同主催

● 9月1日　小田原ビエンナーレ　太田曜作品上映　研究会協力企画

● 9月15日　PLACE M Alain ESCALLE 作品上映 研究会主催ミストラルジャパンとの共同主催

● 11月24日　実験映画を観る会VOL-11浅野優子特集　研究会主催　8ミリフィルム小金井街道プロジェクトとの共同主催

● 3月31日　実験映画を観る会VOL-8　伊藤隆介特集　研究会主催　8ミリフィルム小金井街道プロジェクトとの共同主催



● アナログメディア研究会 実験映画を観る会　VOL.8

伊藤隆介 特集上映

日時：2024年3月31日（日）14:00～17:30

会場：小金井市中町天神集会所

主催：日本映像学会 アナログメディア研究会／8mmフィルム小金井街道プロジェクト

当学会会員で実験映画作家・美術家である伊藤隆介によるカメラレスの短編映画15作品について上映を行った。一作ごとの解説と共に作品鑑賞をする形式で、上映後は作家と水由章（会員、映像作家、ミストラルフィルム代表）によるトーク、来場者との質疑応答を行った。

今回上映した伊藤作品は主に、8mm、9.5mm、16mm、35mmフィルムなどの様々なフォーマットのファウンド・フッテージ（販売用映画フィルムやホームムービーなどの既製のコンテンツ）の物理的なコラージュを通して制作されている。初期の『版シリーズ』では、透過性のあるコラージュのタブロー作品を「原版」とし、生フィルムにイメージを密着焼きして上映用のプリントが制作されており、近作では素材となるフィルムからイメージが切り出されて、その組み合わせや接合により上映用フィルムが直接に制作されている。また音声は、フィルムのサウンドトラック領域にはみ出した映像イメージを、映写機の光学ヘッドが音声情報として再生したノイズ音である。

今回の特集上映では、全作品をオリジナル・フォーマットである16mmフィルムで行うことにより、映像メディアにおける支持体（フィルムや機材といった機構）の物質性を体感し、考察する機会となった。

上映作品

①『版 #2、#1及び#3』（1999年／4分）
②『版 #9、#6、#7、#11、#5及び#8』（1999年／8分）
③『版 #13、#14、#12及び#10』（2000年／7分）
④『版#15～18』（2001年／7分）
⑤『版#19～22』（2003年／8分）
⑥『Songs（版#23）』（2003年／3分）
⑦『版#24（回転体）』（2004年／3分）
⑧『Household Movie』（2005年／4分）
⑨『版#26～29』（2007年／8分）
⑩『Flat, Split Reel』（2008年／9分）
⑪『版#43～44（二枚舌）』（2009年／5分）
⑫『当映画館にて上映されます（V Nasich kinech uvidite）』（2010年／5分）
⑬『悪魔との契約（Zmluva s diablom）』（2013年5分）
⑭『私がスパイだったら（Kdybych byl spion）』（2014年／7分）
⑮『段差と性欲』（2024年／8分）

※上映後に伊藤と水由章によるトークおよび質疑応答（約50分）を行った。

『悪魔との契約』

『私がスパイだったら』

● アナログメディア研究会 実験映画を観る会VOL.9

関根博之特集　8ミリフィルム小金井街道プロジェクトとの共同主催

日時:2024年5月19日 14:00～17:30
会場:小金井市中町天神前集会所
主催:日本映像学会 アナログメディア研究会
　　8ミリフィルム小金井街道プロジェクト

　第9回目を迎えた実験映画を観る会は、伝説の8ミリ廃墟映画作家 関根博之の特集上映。全て8mmフィルムで撮影された作品で、市場や米軍基地等の東京に点在した廃墟が、ロングショットの緊張感のある空気感で写しだされている。トークでは各作品の制作意図が詳しく聞くことができ、作家が追い求めた8ミリカメラとの身体性についての話が印象的であった。作家とカメラと空間の3つが織り成す映像は8ミリフィルムのひとつの境地のようで、8ミリの表現の可能性について考察する機会となった。

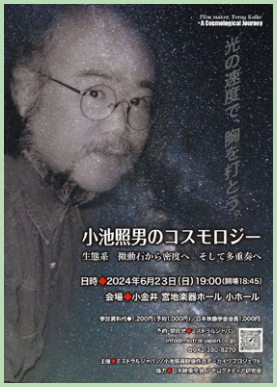
プログラム
①上映＆解説 関根博之作品
『エチュード』8mm/13min./1978
『Tokyo Sampo vol1』8mm/28min./1987
『AKIHABARA』8mm/23min./1991
『U・O』8mm/22min./1992
『U・O2』8mm/30min./1993

『AKIHABARA』

②トーク＆質疑応答 関根博之 (聞き手:よこえれいな)

【関根博之プロフィール】
1957年10月7日　東京生まれ
10代終わりに佐藤重臣主催の「黙壺子（もっこす）フィルムアーカイヴ」などでアメリカのアンダーグラウンド映画を見て、衝撃を受ける。1980年多摩芸術学園映画学科卒業。在学中より1980年代前半までほしのあきら率いる「上映集団ハイロ」に参加。8ｍｍによる作品制作、上映活動を始め、その後20年ほど個人映画の可能性を模索し続ける。

● 小池照男　作品上映　研究会協力企画



アナログメディア研究会 協力企画
小池照男のコスモロジー「生態系　微動石から密度へ　そして多重奏へ」
日時：2024年6月23日（日）19:00～21:15
会場：小金井 宮地楽器ホール（小金井市民交流センター）小ホール
主催：ミストラルジャパン／小池照男映像作品アーカイヴプロジェクト
協力：日本映像学会 アナログメディア研究会

　映画「生態系」シリーズを40年以上に渡って制作してきた小池照男は、2022年3月に惜しくも病によって亡くなった。残された映画とビデオ、未整理の素材などを有志でアーカイヴ作業を続け、全4巻のDVD「映画作品集 小池照男のコスモロジー」が完成した。
　DVD発売を記念して、砂つぶよりも高密度な映像にこだわった、生態系シリーズの集大成ともいえる傑作『生態系-29-密度3』と、闘病日記としてFacebook上で日々発信してきた「多重奏」の一部を上映。またアーカイヴプロジェクトのメンバーでもある南俊輔が、30数年の時を経て『生態系-5- 微動石』の撮影地に赴き、小池照男の手法にならって映像を再現した経験をもとに作品解説をおこなった。トークも交えて、改めて小池照男の映画について考究する機会となった。

プログラム
①上映　小池照男作品
『生態系-29- 密度3』Digital/ 35min./ 2020
『多重奏を楽しむ』Digital/ 15min./ 2020
『生態系-5- 微動石』8mm(デジタル上映)/ 17min./ 1988
②作品解説　南 俊輔
〈生態系シリーズ〉の聖地で『生態系5』を考察する
③トーク　南 俊輔＆水由 章＆櫻井篤史
（小池照男映像作品アーカイヴプロジェクト メンバー）

小池照男（こいけ てるお）プロフィール
1951年愛知県生まれ。映画作家。篠笛演奏家。
神戸大学在学中より映画制作を始め、1981年から着手した「生態系シリーズ」はライフワークとなり30作品を数える。1983年ヴォワイアン・シネマテークを設立。1996年以降、神戸にて「映像のコスモロジー」などの企画展を主宰。2022年3月16日、病により永眠。
小池照男映像作品アーカイヴプロジェクト　website
https://ecosystemvideo.jimdofree.com/

● アナログメディア研究会 実験映画を観る会　VOL.10
奥山順市特集　8ミリフィルム小金井街道プロジェクトとの共同主催

奥山順市 パフォーマンス
『山手線・外回り編』

〈実験映画を観る会Vol.10：奥山順市特集上映・レクチャー〉
【概要】
〈実験映画を観る会Vol.10〉では、「奥山順市特集上映・レクチャー」をおこなった。今回は少々変則的で、映画の上映ではなくレクチャーが中心である。二部構成になっていて、第一部は奥山順市による初期映画に関するレクチャー、第二部は1994年におこなった伝説的パフォーマンス《クロス・プロジェクション》を残された映像をもとに再構成する試みである。

日時：2024年7月14日(日)14:00~
場所：小金井市中町天神前集会所
　〒184-0012 東京都小金井市中町1丁目7-7
参加資料代：1,000円
主催：日本映像学会アナログメディア研究会、8 ミリフィルム小金井街道プロジェクト
【プロフィール】
　奥山順市（おくやまじゅんいち）：1960年代から一貫してフィルムに着目し、映写のメカニズム、フィルムの物質性、現像のプロセスなど、映画の構造をテーマにした実験映画を制作。映画の本質を追求するその作品は、「映画解体計画」「映画組成計画」「映画発掘計画」という三つの時期に分けられる。主な作品に『切断』（1969）、『No Perforations』（1971）、『LE CINÉMA・映画』『Human Flicker・映画誕生』（1975）、『我が映画旋律』（1980）などがある。 2019年の〈9.5ミリ・ワンマンフィルムフェスティバル〉で、作家活動の引退を宣言した。

【上映プログラム】
　第一部：レクチャー「奥山順市、初期映画を語る」（80分）
　今年の3月にイメージフォーラムでおこなったレクチャーの再演。
　「―〈スタートは、お一人様映画から始まった〉〈Peep show / 覗き活動写真は、今風に言えば“ソロ・シネマ”〉　「キネトスコープ」から始まり「ミュートスコープ」「キノーラ」へと展開する。映画館とは違う、別の映画史だ。遊戯場、家庭が舞台となっており、語られることはなかった。 80分（予定、講演＋映像）※山手線 外回り編（1970/2024）の展示＆デモンストレーションもあり。」（イメージフォーラム「映画する人―奥山順市レトロスペクティブ2024」の告知より）

　第二部：トーク「《クロス・プロジェクション》再考」（聞き手：西村智弘）（70分）
　奥山順市の《クロス・プロジェクション》は、1994年に埼玉県立近代美術館に出展されたインスタ　レーション＆パフォーマンスである。映写会場と映写室の融合がテーマで、35ミリ映写機1台、16ミリ映写機、8ミリ映写機が3台ずつ、テレビモニター2台、スライド・プロジェクター4台を使い、すべてが一体化したスペクタクルが展開される。奥山のパフォーマンスとしては最大で、高度に複雑な構造をもつが、観た人が少ないため幻の作品になっている。今となっては再現不可能なこの作品を、収録版などを上映しながら再構築する。

【スケジュール】
　13:45　開場
　14:00~15:20 第一部：レクチャー「奥山順市、初期映画を語る」
　　私家版『ミュートスコープとキノーラ』(まとめ：おうさん、2024）
　　奥山順市『山手線・外回り編』（1970/2024）
　15:20~15:30 休憩
　15:30~16:40 第二部「《クロス・プロジェクション》再考」（聞き手：西村智弘）
　　『奥山順市の部屋―クロス・プロジェクション［収録版］』（1995/2024）
　　『Jun'ichi Okuyama's INDEX MOVIE』(2008)など

● 小田原ビエンナーレ　太田曜作品上映　研究会協力企画

太田曜 実験映画 16mm FILM作品上映

2024年9月1日　日曜日　13時20分 開場　上映13時30分～15時30分

おだわら市民文化交流センター UMEKO 会議室 5・6

住所：〒250-0011　小田原市栄町一丁目1番27号（小田原駅東口駐車場 1 階）

小田原ビエンナーレは現代美術作家の飯室哲也が中心となって10年以上続いている催しだ。主に美術作品展覧会を小田原市内の画廊や公共施設で行い、並行して太田が実験映画のフィルムでの上映を研究会協力企画として行なってきた。日本では実験映画と美術が並行して展示・上映される機会は非常に少ないが、ヨーロッパでは美術館で実験映画が上映されたりするのは普通のことだ。そもそも1920年代のアヴァンギャルド・シネマの担い手の多くはハンス・リヒター、マン・レイ、フェルナン・レジェなどほとんどが美術家達だった。小田原ビエンナーレでの実験映画上映は2015年には実験アニメーションの浅野優子と太田曜の作品、2017年には渡辺哲也と太田曜の作品、2019年には研究会メンバーの川口肇、水由章、太田曜の作品、などの実験映画作品上映をフィルムで行なってきた。今回は太田曜の作品を特集で上映した。上映の当日は前日の台風の影響もあり、小田急線が不通になる中、遠方からの方も含めて想像以上の方がおいで下さった。

日本では現代美術に限らず、他の分野と実験映画との交流は多くは無い。あるいは実験映画と他の映画の間の交流も多いとはいえない。現代美術と実験映画との交流を続ける小田原ビエンナーレはそういう状況の中貴重な存在だと思う。今後も交流のあり方を模索したい。

上映作品　全14本　上映時間84分

●UN RELATIF HORAIRE 16ミリ　カラー　サイレント　2分1980年

●UNE SUCCESSION INTERMITTENTE 16ミリ　カラー　サイレント　2分1980年

●UN RELATIF HORAIRE No3 16ミリ　カラー　サイレント　3分1980年

●STÄDEL 16ミリ　カラー　サイレント　7分1986年

●5400Secondes 16ミリ　カラー　サイレント　10分1987年

●FLOTTE 16ミリ　カラー　サウンド／サイレント　9分1994年

●ENTOMOLOGIST 16ミリ　カラー　サウンド／サイレント　8分1996年

●INCORRECT INTERMITTENCE　カラー　サウンド　6分2001年

●SPEED TRAP　カラー　サウンド　6分2004年

●SURF/LENGHT カラー　サウンド　8分2010年

● 根府川(Nebukawa) パート・カラー　サウンド　6分2012年

●ULTRAMARINE カラー　サウンド　5分2014年

●Les Grands Boulevards カラー サウンド6分2019年

●新作 OPTICAL SOUND FILM 2024 パートカラー　サウンド　6分2024年

『Optical Sound Film』画面拡大

主催：小田原ビエンナーレ実行委員会

協力：日本映像学会アナログメディア研究会

● PLACE M Alain ESCALLE 作品上映 研究会主催ミストラルジャパンとの共同主催

Alain ESCALLE アラン・エスカル　作品上映

● 2024年9月15日日曜日　16時～18時

● PLACE M 東京都新宿区新宿1-2-11 近代ビル3F

アナログメディア研究会ではこれまでにアラン・エスカルの作品上映、作家本人のトークを何度も行ってきた。最近では2019年に新宿PLACE M で、2017年に阿佐ヶ谷美術専門学校で。アナログメディアを研究する研究会がデジタルの最新映像システムを駆使して映像作品を制作するアラン・エスカルの作品上映を行うのは、彼の制作方法が極めて手工業的、アナログ的だからというのもある。当時の最新鋭デジタル映像製作システムだったハリーの時代から今日のインフェルノまで、アラン・エスカルの制作方法は他のクリエイターとは一線を画している。動画のフレームを一枚ずつ取り出してペンで直接画面に描く絵画的方法は独特だ。使用しているシステムは最新のデジタルだが行っていることは極めてアナログ的だ。今回の上映では

最新作から日本でミストラルジャパンも製作に加わっている『浮世物語』までの作品を上映した。上映後のトークでは最新作に限らずほとんどの作品で画面が少なくとも50レイヤー程度かそれ以上で構成されていることが語られた。また、インフェルノを自宅のパソコンに入れて、大掛かりなスタジオに出掛けて作業をしなくて済むようになり、プロデューサーの意向を考慮せずに作品制作ができるようになったことが紹介された。今や最新のデジタルシステムも自宅に構えられるようになり、気が済むまでアナログ的手法で作業が可能になっている。最近はモーションキャプチャーのシステムも自宅に導入したそうで、どのような作品が作られるのか次回の来日、上映が期待される

●上映作品　約87分

1- FINAL GATHERING - (2016 / 13 minutes)

2- ETREINTES - 抱擁(2020 / 13 minutes)

3- LE LIVRE DES MORTS Edition Spéciale –死者の書(2018 / 35 minutes)

4- L'OBJET DU DESIR - (2001 / 2 minutes 30)

5- LE CONTE DU MONDE FLOTTANT – 浮世物語(2001 / 24 minutes)

『抱擁』

●アラン・エスカル　ホームページ　スタジオAE

http://www.studioalainescalle.com

●主催　日本映像学会アナログメディア研究会

https://www.facebook.com/analogmedia/

analogmediazoom@gmail.com

ミストラルジャパン　info@mistral-japan.co.jp

● アナログメディア研究会 実験映画を観る会　VOL.11

浅野優子特集　8ミリフィルム小金井街道プロジェクトとの共同主催

“ドローイングも人形も繊細・華麗なアニメーション”

日時：2024年11月24日　（日）14:00～17:30

会場：小金井市中町天神前集会所

主催：日本映像学会 アナログメディア研究会

８ミリフィルム小金井街道プロジェクト

概要

浅野優子は、ドローイングアニメーションや布を使ったロトスコープなどの平面アニメーションだけでなく、人形や幾何学体を使った立体アニメーションなど、幅広い素材や手法を用いて実験アニメーションを制作している。作品は華麗さとグロテスクさが融合した独特な雰囲気を特徴としており、その多様な表現形式に関わらず一貫した世界観を持っている。

本特集上映では、1994年までに制作された8ミリフィルム作品11本および16ミリフィルム作品7本、合計18本をフィルム映写機で上映する貴重な機会となった。上映後には、浅野氏自身による作品解説、トークセッション、観客との質疑応答が行われた。

プログラム　18作品　約80分

『in dark trees』　1978年制作 8mm 24コマ 2分20秒

『水の音』　1980年制作 8mm 24コマ 3分

『西のマントラ』　1981年制作 8mm 24コマ 2分40秒

『ペリザンナ』1981年制作 8mm 24コマ 2分40秒

『晴れ』1982年制作 8mm 24コマ 2分30秒

『BAMBiNO』1982年制作　16mm　マグネ　2分

『螺旋迷宮』　1982年制作　16mm　マグネ　2分30秒

『月の娘』　1983年制作 8mm 24コマ 4分

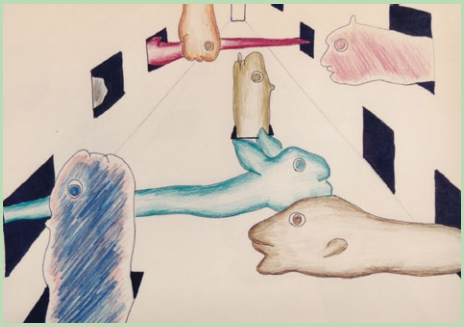
『鳥たちの棲むところ』1983年制作 8mm 24コマ 2分

『花粉』1984年制作 8mm 24コマ 8分40秒

『柳水華苑』1985年制作 16mm 音声:マグネ 4分

『木の中刺す魚の気』1985年制作 8mm 24コマ 5分50秒
『聖エルモの灯』1985年制作 8mm 24コマ 2分10秒
『水辺の植物』1986年制作 16mm 音声:マグネ 3分
『爬虫類』1987年制作 16mm 音声:マグネ 4分40秒
『ナルコレプシー』1987年制作 8mm 18コマ 7分10秒
『五つの指の庭』1988年制作 16mm 音声:光学 5分10秒
『蟻の生活』1994年制作 16mm 音声:光学 14分10秒

浅野優子（あさのゆうこ）プロフィール
1959年東京生まれ。ディズニー映画「ファンタジア」の「くるみ割り人形」に影響を受け、武蔵野美術大学油絵学科在学中、自主制作アニメーションを作り始める。1980年に相原信弘氏の呼びかけにより発足した自主制作作品上映グループ「アニメーション80」に参加し、ほぼ毎年作品を出品する。「トリノ国際映画祭」（1986年、イタリア・トリノ）、「上海アニメーションフェスティバル」（1988、中国・上海）、「アニメ進化論」（1988、O美術館）への出品など、海外でも多数の作品が紹介されている。
近年では主に女性たちによって作られてきた手芸の技術に焦点を当て、美術や映像作品に反映することで新たな表現に挑戦している。



『水の音』1980年

（おおた よう／アナログメディア研究会）

アジア映画研究会

石坂 健治

◉公開イベント「アートはどこにあるのか?――ルアンルパのサザン・スタイルのキュレーションの過激な可能性」（第３期第23回（通算第56回）としてカウント）
日時：2024年５月31日（金）18時～19時30分
会場：神奈川大学みなとみらいキャンパス 1F 体験・展示エリア
講師：マーク・ノーネス（ミシガン大学）
座長：秋山 珠子（神奈川大学）
主催｜日本映像学会アジア映画研究会
共催｜JSPS基盤研究(C) 23K00224

本年度第１回の公開イベントとして、神奈川大学みなとみらいキャンパスにて「アートはどこにあるのか?――ルアンルパのサザン・スタイルのキュレーションの過激な可能性」と題した研究会を開催し（JSPS基盤研究(C) 23K00224共催）、ミシガン大学のマーク・ノーネス氏が報告を行い、当研究会の秋山が企画・進行を担当した。また研究会に先立ち、関連企画として、講師とともに横浜トリエンナーレを参観するツアーを行い、横浜美術館の帆足亜紀氏が展示解説を行った。

インドネシアのアート・コレクティブであるルアンルパによるキュレーションが大きな議論を呼び起こした2022年のドクメンタ15。1955年に新たな民主主義国家としてのドイツの姿を世界に示すために設立されたドクメンタは、5年ごとに開催され、世界最大級の、影響力ある国際芸術展の一つとなった。2022年に至る各回までは、招待されたキュレーターがテーマと作品を選定していたが、ルアンルパは、地元インドネシアの感性に根ざした芸術実践を通じて、これを一変させた。彼らはグローバルサウスまたはそのディアスポラから成るコレクティブを招き、それらのコレクティブが他のコレクティブ（推定1,500人のアーティスト）を招待し、参加者全員が自分たちの作品を選ぶというスタイルを採用した。今回の報告でノーネス氏は、日本関連のコレクティブとして招かれた、東京リールとシネマキャラバンという2つのプロジェクトの比較を通じて、ドクメンタ15の「サザン・スタイル」の芸術実践が地元の展示戦略に置かれた際に示す、野生的で、魔術的で、錯綜した可能性を内部観察者の視点から描写した。

続くディスカッションでは、氏の報告および参観した横浜トリエンナーレに即し、映像を含むアートをめぐるポリティクスについて、各参加者の具体的な立場からの問題提起がなされた。世界各地で分断が進行するいま、芸術の新たな可能性と課題が浮き彫りとなる充実した議論は、参加者それぞれが直面する社会的・文化的な課題と深く結びつきながら、多様な視点と経験を共有する貴重な機会となった。

（文責：秋山 珠子）

ドクメンタ15（2022年）

横浜トリエンナーレ（2024年）参観ツアー

◉公開イベント「ベトナム映画の新星 ファム・ティエン・アン 監督特集／A New Star in Vietnamese Cinema: A Special Screening of Films by PHAM Thien An」（第３期第24回（通算第57回）としてカウント）
会期：2024年6月29日（土）
会場：アテネ・フランセ文化センター
主催｜アテネ・フランセ文化センター
共催｜日本映像学会アジア映画研究会、映画美学校
協力｜福岡市総合図書館、東京フィルメックス、ムービー・アクト・プロジェクト
作品提供｜JK Film、CERCAMON
担当：石坂 健治（日本映画大学、本学会員）
◎開催趣旨
近年活況を呈しているベトナム映画の新星ファム・ティエン・アンは、これまでに２本の短編映画と１本の長編映画を監督している。長編第一作『黄色い繭の殻の中』は、2023年のカンヌ国際映画祭でカメラドール（新人監督賞）を受賞。独学で到達したと言われるその個性的な映画言語はアンドレ・バザン賞や東京フィルメックス最優秀作品賞を受賞するなど世界的な注目を集めている。
今回の特集ではファム・ティエン・アン監督の全作品３本を上映するとともに、トークを実施し、同監督の現在と未来の可能性について考える。
◎上映スケジュール
14:00～『黄色い繭の殻の中』（178分/DCP/日本語字幕）
17:30～『静黙』（15分/DCP/日本語字幕）＋『常に備えよ』（14分/DCP/日本語字幕）
トーク：四方田 犬彦（映画研究者、比較文化研究者）
石坂 健治（当研究会代表）
※作品解説・監督プロフィールなど詳細はwebページ参照
http://www.athenee.net/culturalcenter/program/ph/pham.html
2023年８月の公開イベント「日越外交関係樹立50周年記念　ベトナム映画の現在 plus ／The Past and Present of Vietnamese Cinema plus」に引き続き、アテネ・フランセ文化センターとの共催で２回目のベトナム映画特集を開催。2023年のカンヌ映画祭でカメラドール（新人監督賞）、東京フィルメックスで最優秀作品賞を受賞した注目の若手監督ファム・ティエン・アンの全作品（長編１本、短編２本）を上映するとともに、つい先頃もベトナムに赴いて文化事情のリサーチを重ねている四方田犬彦氏と当研究会・石坂による対談を行った。フィルメックス受賞の影響もあったのだろう、多くの観客が来場した。
対談では、ベトナム映画の新潮流に関心を示す四方田氏から、古い写真に写っている場所を訪ねて旅をする映画として、また青年の心象とともに旅路の風景が移ろっていく彷徨と再生の物語として、『都会のアリス』など1970年代のヴィム・ヴェンダース作品との近似が指摘された。石坂からは、徹底した長回しを基軸とする３時間の同作について、海外のある研究者がショットの数と１ショットの平均時間を数えたところ、ショット数がわずか67で、１ショットの平均が３分の長さに達していた、という逸話を紹介するとともに、近年のスローシネマの代表格ともいえる同作だが、アピチャッポンやラヴ・ディアスのそれとは趣きが異なる部分もあり、とくに360度のパン、効果的なフラッシュバック、現実とファンタジーの往還、旅路の長回しと人物同士の会話シーン（いわゆる芝居場）の混在、といった顕著な特徴を解説した。
アテネ・フランセ文化センターとの共催によるアジア映画特集は好評につき今後も継続を予定している。ご期待ください。
（文責：石坂 健治）

◉第３期第25回（通算第58回）例会
日時：2024年11月7日（木）19時～20時30分
会場：Zoomによるオンライン開催
座長：韓 燕麗（東京大学、本学会員）
内容：中国大陸ドキュメンタリー映画史に関する著作と合作映画の製作をめぐる討議
①発表「書評：Ying QIAN, *Revolutionary Becomings: Documentary Media in Twentieth-Century China*に触発されて」
発表者：龐 鴻（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）
②発表「1990年代における日本と香港の合作映画について」
ゲスト／発表者：陳 麗英（日本大学藝術学部 研究員）
今回の例会はオンライン形式で開催され、最新の研究成果の紹介と映画製作経験の共有という二部構成で進められた。
第一部では、龐鴻会員が、2024年刊行の中国ドキュメンタリー映画史研究著作*Revolutionary Becomings*に関する発表を行った。本書は、コロンビア大学副教授の錢穎氏が20世紀中国大陸におけるドキュメンタリー映画の歩みを体系的に整理・考察・分析した労作である。発表者はまず、各章の内容を概説した上で、本書における日本関連の記述を整理し、日本が中国ドキュメンタリー映画史に与えた影響について考察を加えた。
続いて、本書から示唆されるドキュメンタリー研究の可能性、中国映画史研究における新たな視座、「革命的メディア」という分析の枠組みの限界などについて批評を展開した。
第二部では、陳麗英氏が、自身が関わった日港合作映画『孔雀王』（1988）製作への参加経験に基づいた発表を行った。集英社の同名マンガを原作とする本作は、1980年代末にゴールデン・ハーベスト社により企画され、日本市場向けと香港市場向けの二つのバージョンが製作された。陳氏は、脚本の翻訳、通訳、キャスティング、撮影現場において同時進行された二バージョンの撮影、ポストプロダクションにおける分業体制など、『孔雀王』製作時の具体的な作業内容を紹介した。加えて、異なる地域間の文化的共鳴への配慮、版権分配、合作映画における予算の増大、合作のメリット、そして1992年に製作されたもう一本の日港合作映画『妖獣大戦』にも言及した。
今回の二つの発表は、国別・地域別映画研究と映画製作を主軸としながら、日本をはじめとする他国・他地域が中国大陸・香港映画に与えた影響を指摘し、国境を越えた文化・技術交流が映画製作において果たす役割について示唆を与えた。
今回はオンライン形式の利点を活かし、日本・中国・アメリカから参加者が集った。とりわけミシガン大学のマーク・ノーネス氏は、①で扱われた*Revolutionary Becomings*の著者　錢穎氏の博士論文審査員を務めた人物で

もあり、本書が執筆された事情やその背景について貴重な情報を提供した。そして、発表内容をめぐり、参加者による活発な議論が展開された。松岡環氏らは香港映画の製作現場について議論を交わし、秋山珠子氏、吉川龍生氏は中国ドキュメンタリー映画史における日中交流について質問と重要な補足を加えるなど、参加者にとって非常に有意義な時間となった。

（文責：龐 鴻／ホウ・コウ）

（いしざか けんじ／アジア映画研究会代表、日本映画大学）

写真研究会

橋本 一径

第13回の写真研究会研究発表会は2024年7月13日に早稲田大学戸山キャンパスにてハイブリッド形式により開催され、3名の発表者による発表と、それらの発表についての活発な議論が繰り広げられました。以下に発表者自身による要旨（内村麻奈美氏、高橋倫夫氏）、および当日司会を務めた橋本一径によるショーン・ハンスン氏の発表の要旨を掲載いたします。

内村麻奈美（早稲田大学博士課程）「フォト・ コラージュの系譜から見る岡上淑子作品――エルンスト、ヘーヒ、タイゲとの比較を中心に――」

1950年代を中心に活動したコラージュ作家・写真家の岡上淑子（1928-）は、戦後に進駐軍が古書店に売却した『VOGUE』や『LIFE』といった洋雑誌を用いてフォト・コラージュを制作した。50年代から今日に至るまで、彼女の作品は瀧口修造が美術雑誌・ カメラ雑誌を中心とするメディアに掲載した紹介文を筆頭に、シュルレアリスムの文脈から評価されてきた。2000年代以後の国内外先行研究においては、マックス・エルンスト、ハンナ・ヘーヒ、カレル・タイゲといった国外のシュルレアリストおよびダダイストによるコラージュと岡上作品との比較や、類似の指摘が見られる。実際これらの先行研究は、岡上作品の国際的な位置付けをフォト・コラージュという点から考察する上で重要な示唆をもたらしてくれるが、いずれも字数の限られた媒体に発表されたものであることから、さらなる分析の余地が見られる。また一方で岡上は「日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ」（2013年）において、エルンストのコラージュから背景に写真を用いる表現を触発された他には、自身の作品がシュルレアリスム運動と直接関係をもたないと語っている。岡上作品はむしろ、戦後日本の女性がおかれた状況――映画や雑誌など欧米文化の輸入や「洋裁ブーム」など――に基づいているのだ。

本発表では、このように位置付けが困難である岡上作品を、先行研究で指摘される3人の国外作家とあらためて比較することで、岡上がシュルレアリスムからいかに異なっているか、そしていかなる要素がそれらに類似点をもたらすのかを分析する。エルンストとの比較からは、シュルレアリスムのデペイズマンを知る以前から実践されていた異物同士の「着せ替え人形」としての岡上作品の様相が、ヘーヒとの比較からは、裁縫に携わる女性の「切る・貼り合わせる」といった手仕事や脈絡のないモティーフ同士の相関関係による映像的な運動を発見することができる。そしてデレク・セイヤーによって類似が指摘されるタイゲのフォト・コラージュとの比較からは、組み合わせる写真同士の明度を緻密に操作し、映画的なライトアップによって女性身体を前景化させる岡上作品の手法が明らかになるだろう。そして、これらの岡上作品がもつ一種のヴァナキュラーな営みとしての重要性を考えたい。

高橋倫夫（早稲田大学博士課程）「『小梅日記』にみる死者の像と写真――幕末・明治の和歌山の事例から――」

わが国の遺影は写真の普及後、日清・日露など明治の戦争を契機として広がったとされることが多いが、その一方で、江戸時代後期から上層農民や町人の間で、家族の死後あるいは死を予期した生前に、肖像画を制作することが行われていた。しかしこうした肖像画制作の実態は、文献史料の乏しさからほとんど明らかでなかった。そのなかで紀州藩の藩校教師の妻・川合小梅（1804－1889）は、晩年まで日々の出来事を記した『小梅日記』を残している。彼女は市井の一画人でもあり、日記には何点かの死者肖像画の制作を行ったことが記されている。小梅の活動時期は幕末から明治初期という日本における写真導入期にあたり、肖像制作も写真の影響を受けずにはいなかった。本発表では『小梅日記』を詳細に読み解くことを通じて、写真以前の死者肖像画の実態を解明するとともに、それが写真の浸透に伴い

どのように変化していったかを明らかにしようした。まず、近世後期から親族の死に際して肖像画を制作することが、下級武士や庶民のあいだで稀でなかったことを示した。さらに、写真が一般に浸透するにつれて、肖像に対する見方や、制作・依頼のあり方に変化が生じたことを論じた。このように本研究会では、明治後半の戦争で遺影写真が本格的に広まる以前の時代に焦点を当て、『小梅日記』という一女性画人の日記を通じて、和歌山という地方都市の限られた事例ではあるが、死者の像の実態と写真との関わりについて発表を行った。

ショーン・ハンスン（Hansun HSIUNG）（ダラム大学）「空飛ぶ眼差し――念写／Thoughtographyの戦後――」

念写の歴史を総合的に研究し、その著作を準備しているダラム大学のショーン・ハンスン氏は、準備中の著作の中から、戦後における念写の実践を扱った部分の草稿を披露してくれた。心霊主義的な文脈において理解することが比較的容易であった戦前までの念写の実践と比べて、とりわけ福来友吉の死後の念写は、これまで漠然と「オカルト」の範疇に含められてきただけで、学術的な位置づけについては未整理なままだった。ハンスン氏はこの未開拓の領域に「テレビ」という問題系を導入することにより、念写の問題を、この大衆的メディアが喚起した人々の想像力をめぐる、広範なメディア論へと展開する射程を提示してみせた。すなわち戦後の念写とは空中を行き交うテレビの電波のある種の「傍受」であり、またそれはバラエティ番組で念写をはじめとする超常現象を披露してみせた少年たちの姿とも交錯し、そしてそうした少年たちの姿は、深夜の放送終了後や、親たちに視聴を許された時間の後にも、なおもテレビを見ることを欲望する子どもたちによる、「テレビごっこ」遊びとも通底するだろう。19世紀以来の心霊写真が、写真というものに人々が何を求めていたのかを明らかにしてくれるイメージであったとすれば、戦後の念写とは、冷戦期のテレビをめぐって人々が思い巡らせた想像力を捉えるための糸口にほかならず、ハンスン氏の来たるべき書物により、視聴者の想像力を含めたテレビ論を構想するためには、念写の問題を経由することが不可避であることが決定的となるだろう。

（はしもと かずみち／写真研究会代表、早稲田大学）

映像人類学研究会

田淵 俊彦

第7回映像人類学研究会を以下の通り開催した。

日時： 2024年6月23日（日）15:00～17:00
開催方法： Zoomによるオンライン開催
テーマ(今回の目的)：「アニメーション・ドキュメンタリー」の手法・特色や可能性を探った前回第6回研究会に続き、ドイツ在住のアニメーション作家・米正万也氏にリアルタイムオンラインで講演いただき、「アニメーションと実写映像の融合」の可能性を検討する。米正氏は、手描きのアニメーション動画をウィーンの風景の中で撮影するという独特な手法を用いた作品『Wiener Wuast』の制作者であり、日本や海外の様々な場所を旅し、その土地の人々や学生とワークショップや共同制作をおこないながら創作活動を展開している。そのパワーの源や発想の原点はどこにあるのだろうか。多くの賞を受賞した初期作品『believe in it』から、これまでの足跡を探る。また「手持ちアニメーション」の手法で制作された「Daumenreise」シリーズにおける「アニメーションと実写映像との融合」についての実践を通して、その可能性や将来性、有効性について検討する。

申込者数： 98名　**参加者数：** 52名
講演者： 米正万也/Maya Yonesho、映像作家・講師
嵯峨美術短期大学（現：嵯峨芸術大学）でデザインと映像を学び、中学校美術科教諭として6年間勤務。そののち京都市立芸術大学、同大学院で日本画、造形構想を専攻、交換留学先のイギリス Royal College of Art で「言葉がわからなくても、わかりあえる」をテーマに13カ国の言語にシンクロする抽象アニメーション『introspection』を制作。帰国後、言葉と音楽にシンクロする『believe in it』で1998年に文化庁メディア芸術祭優秀賞受賞。2002～2003年に文化庁在外研修員としてバルト三国のエストニアに滞在。8人のエストニア製本作家の協力を得て制作した『Üks Uks』は2005年オーストリア Tricky Women　国際女性アニメーション映画祭のトレイラーに採用。作品は、国際映画祭、デュッセルドルフ・クンストハレ現代美術館（ドイツ）、エストニア・デザイン博物館等で展示・上映。子供から大人まで対象の様々なワークショップを各地で行っている。手描きの動画をウィーンの風景の中で撮影した『Wiener Wuast』の後、その手法を用いた「Daumenreise　プロジェクト（Daumen=親指、Reise＝旅）」を個人制作とワークショップとして三大陸22カ国で展開、2024年はポーランドとスイスで開催予定。ドイツ・シュトゥットガルト在住。
事前視聴作品概要： 参加者には、以下4作品を事前に視聴していただいた。
1.『**believe in it**』(1998) 第45回オーバーハウゼン国際短編映画祭入選、第2回文化庁メディア芸術祭アニメーション部門優秀賞、インド・ウィークオブザマスターズアニメーションセレブレーション審査員特別賞ほか／大切なのは、できると信じてやってみること。想像していた枠を超えること。

米正氏は過去には『ポンキッキーズ』のクレイアニメ、NHK教育「いないいないばあっ」の抽象アニメなども手がけているが、現在は世界各国の街でその街の方々と一緒に「お国自慢のアニメ作品」を創るというワークショップを展開している。これを「Daumenreise(ドイツ語でDaum=親指，Reise=旅、つまり「親指の旅」を意味する造語)」と名付けている。2006年にウィーン滞在する機会を得た際、手持ちの材料と機材のみ、すなわち前作「Üks Uks」の制作の残りの和紙を半分に切って倍の枚数にし、デジカメで撮影してラップトップで編集したのが始まりだという。「Daumenreise」シリーズ作品は、22カ国、39都市、46作品に至る。その「Daumenreise」シリーズの中から3作品を事前視聴してもらった。

2.『Wiener Wuast』(2006) ／『Wiener Wuast』は、「ウィンナーソーセージ」はドイツ語で「ヴィーナーヴルスト」。ウィーン訛りで「ヴィーナーヴアシュト」。ソーセージはありふれていること、いろいろ混ぜてあること、両方の意味が含まれ、ウィーン訛りのタイトルをいうだけでも地元の人達が笑顔になる。

3.『Daumenreise 32 Bologna Italy: Sottalportig 』(2012) ／イタリアのボローニャでのワークショップに日本からの画材が届かず、現地ですぐ手に入る赤ワインとコーヒーで描くことに。ピンチはチャンス、の醍醐味。

4.『Daumenreise 23 Kyoto2: おこしやしておくれやす』(2011) ／京都といえば何を思い浮かべるだろうか。京都をテーマに、関西の5つの美大の学生達が、それぞれの大学に関するモチーフも一つずつ入れているところも見所。

当日のプログラム：

15時00分～　開会の挨拶、映像研究会のこれまで(第1回～第6回)の活動についての報告

15時15分～　講演者・米正万也氏による講演

16時15分～　参加者との意見交換

17時20分　終了

総論：

第 7 回研究会は海外、ドイツからの講演者をお迎えし、オンラインで開催された。時差もあるが、オンラインシステムを通じて遠方に在住するクリエイターの方の講演を伺い、リアルタイムで双方向型の意見交換をおこなう貴重な機会となった。

申し込み人数はこれまでの最多の98名。芸術科学会、映像人類学フォーラム、日本アニメーション学会海外文献研究部会などの協力も得て、日本全国からの参加者、海外からの留学生などオンラインの特性を十分に生かした開催となった。代表者の本務先・桜美林大学のゼミ生も出席し、学生からの作品に対するコメント、講師に対する質問なども展開された。現地では日曜の早朝という時間にもかかわらず、米正氏の講演は魅力的で興味深いものであり、活発な意見交換をおこなうことができた。

ご自身がアニメーション作家となったいきさつや世界各国で展開しているワークショップの裏話など、アニメーションやクリエイターを目指す学生や大学院生、留学生などにとっても刺激的で励みとなる内容であった。ワークショップで現地の主として学生である参加者にお題を出すときに「おもしろいことや美しいことだけでなく、ちょっと困ることも探して」くるように助言するという工夫は示唆に富むものであった。講演を通じて、米正氏の人柄が伝わるものであり、表現者／教育者としての実践から多くの論点を提起していただいた。

「手持ちアニメーション」や「アニメーションと実写映像との融合」といったユニークな制作手法に関するエピソードももちろんのこと、「モノづくりの精神」や「発想の転換」に関しても「学び」の多い機会となった。まずアニメーションを作画してからそれに当てはまる風景を探すという手順や、「お弁当を忘れた駅弁売り」や「石のスープ」をめぐる具体的な逸話も、表現の制作過程を探る上でとても興味深いものであった。

オンラインによる参加者からは、「普段の生活のなかではどんな活動をしているか」など多くの質問や意見が寄せられた。講演後のアンケートの活発な反応からも講演の確かな手ごたえを実感させるものであった。以下、例として挙げたい。学生からは「芸術で自分と世界中の人々を自らの力でつなげているのがカッコいいと思いました」、「世界を舞台に活躍されているということで、私は海外で活躍することにとても興味があり、お話を聞いていてとてもワクワクしておりました。将来は世界を舞台に仕事の場を持ちたいと考えているため、その気持ちがもっと強くなりました」、「いい作品を作るためには、作らなきゃという意思よりも楽しむことで作品にもいい影響が出ると作品やワークショップの写真を見て感じました」、「スケッチブックを使ってのアイデアだしは、とても参考になるし、これからも自分で取り組んでいきたいなと思います。また、なにか作品を作るにあたっての作者の気持ち、何を伝えたいかというのは本当に大事だなと思いました」などの意見が寄せられた。映像関係者や研究者からは、「映像は国境も文化も超えることを改めて実感しました」、「ワークショップ参加者にしか分からないイラストの元ネタがあったり、一期一会の様々な偶然が作品になっているという過程を含めて作品になっているのだと思いました」、「『アニメーションでできること』の可能性を広く感じました」、「現地の人と交流しながら作成するということは、ネットの情報だけで現地を知った気になりがちな昨今にこそ、意義のある作品であるように感じました」といったアニメーションや映像の可能性を示唆するような意見が寄せられた。

また、本研究会に対しては、「遠方に住んでいるため今回もオンライン開催としていただき大変助かりました」、「今回、米正さんの講演をきっかけに映像人類学研究会を知りました。今後の活動も追っていこうと思います。次の回も楽しみにしております」、「今後の研究会に期待いたします」、「とても有意義な研究会でした」、「米正さんの人生・ワークショップのお話から、日本のアート教育の話までに話題が大きく広がっていったのが面白く興味深かったです」など今後の研究会の参考となるような意見も提起された。

今後の課題と取組み：

映像によってその土地の文化や人を描き出す米正氏の手法は、「アニメーション」というジャンルにとどまらず、映像によって「人類学」を極めてゆくことの可能性を示してくれた。日本の教育現場では、アーティスト養成よりも、どうしても技能の伝達に重きが置かれてしまう傾向があるが、米正氏のように国際的に活躍されていらっしゃる方の視点は今後のアーティスト養成、芸術教育にも多くの示唆を与えてくれる。したがって、本研究会では今後も制作者の方に直接話を伺う公開研究会として発展させていければと考えている。そしてその試みのなかで、映像の現場をめぐる課題および限界、そこから見えてくる映像の「可能性」を探求していきたい。

第 8 回映像人類学研究会を以下の通り開催した。

日時： 2024年9月7日（土）14:00～16:00

開催方法： Zoomによるオンライン開催

テーマ(今回の目的)： 第 8 回研究会では、「映像領域の越境」をテーマにフィールド調査や取材に基づく領域横断的な美術作品の制作をおこなっている、現代美術家であり映像作家の八幡亜樹氏を招いて話を聞いた。八幡氏の表現は「映像インスタレーション」を軸としている。3面を使用した映像インスタレーションのみならず、ドキュメントや写真、webサイトを併せて展示し一つの作品とする独自の手法は高い評価を受けている。様々な情報伝達の手段を駆使した展示を通して作品表現をおこなう手法は独特で、表現の多様な可能性を探求した実践となっている。またそれらの作品は、綿密なフィールド調査や取材に基づいて構築され、現地の人々と共有されていることからも人類学の手法から生み出されている点に特色がある。それはまさし

く、ジャン・ルーシュが提唱した「共有人類学」にも通ずるものである。八幡氏が「失われそうなもののなかにある、失われない強さ」を映像表現で探求しようとする動機や着想の根源は何であるのか。八幡氏とのトークセッションおよび参加者との質疑を通して、八幡氏の表現活動の方法論や方向性を共に展望した。現代における映像の可能性と課題を探る上での多くの知見を得ることができた。

申込者数：41名　**参加者数：**18名

講演者：八幡亜樹/Aki Yahata（現代美術家、映像作家）

東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。同専攻博士後期課程中退後、滋賀医科大学医学部医学科卒業。フィールド調査や取材に基づく、領域横断的な美術作品の制作を行なう。主なメディアは映像＋インスタレーション。「（地理的/社会的/心身的な）辺境」の概念を追求し、その一環として近年は「手食」や「ロードムービー」に焦点を当てる。ロードムービーをVJの手法で即興する試みなど、映像の多岐にわたる展開も探求する。2022年より世界の手食文化をオンラインアーカイブするウェブサイト「手食」webを立ち上げ、主宰・編集。また最近では、“医術としての芸術”の在り方に着目し、それを「藝医術（げいじゅつ）」と呼び、人間の生命力を伸張する芸術の在り方について改めて思索・探究している。主な個展に、「ザ・トライアングル『八幡亜樹展 ｜ ベシュバルマクと呼ばないで//2022』」(京都京セラ美術館、2023)、「彼女が生きたかった、今日の日に。」（HENKYO.studio、京都、2021）、「楽園創造 vol. 07　八幡亜樹」（gallery αM、東京、2014）、グループ展に「2023 Taiwan International Video Art Exhibition」（鳳甲美術館、台湾、2023）、「逡巡のための風景」（京都芸術センター、2019）、「Journey to the West」（Lalit Kala Akademi、インド、2012）、「REFLECTION」（水戸芸術館、2010）「六本木クロッシング」（森美術館、東京、2010）など。

事前視聴作品概要：参加者には、以下の2作品を事前に視聴していただいた。

1.『jaPandesal2013』

展示形態:　映像インスタレーション[3channel videos+ドキュメント展示] (25分59秒)

本作は、パンデサル(フィリピンの国民食とも言える定番のパン)をめぐるフィリピンの日常と、そこに接続する第二次世界大戦や植民地時代の歴史を「ドキュメンタリーミュージカル」という形式で捉えた作品である。

2.『ベシュバルマクと呼ばないで//2022』

展示形態:　映像インスタレーション[3channel videos+写真＋手食webサイト展示] (10分45秒)

本作品は「手食」を題材とし、そこに複数の事象が絡み合うことで形を成している作品である。

当日のプログラム：

14:00～　開会の挨拶、映像人類学研究会のこれまで(第 1 ～7回)の活動についての報告

14:15～　ゲストスピーカー・八幡亜樹氏とのトークセッション(進行：田淵)

15:15～　参加者との意見交換

16:00　終了

総論：

第8回研究会は京都在住の八幡氏をゲスト講師として迎え、オンラインで開催された。申し込み者は41名とまずまずの人数であったが、当日の参加者は18名と伸び悩んだ。もしかしたら、事前視聴の映像を目当てにした申込者が多かったのかもしれない。実際の参加者数が少なくなる現象については今後の課題とする。一方で、代表者の本務先・桜美林大学のゼミ生など学生の出席、作品に対するコメント、講師に対する質問などが活発に展開されたことはよかった点として挙げられる。

研究会の進行は、講演に慣れていない八幡氏からの要望で、セッション形式でおこなわれた。具体的には、代表の田淵からテーマや問いを投げかける形でトークを進めていった。特徴的な「3面インスタレーション」を導入する要因や作品制作の動機、着想などについて興味深い話を伺うことができた。映像や芸術に対する強い意欲が印象深いものであり、参加者にとっても大いに刺激を受けたにちがいない。

八幡氏は、自身が芸術に向かい続ける目的を、「生きるために必要な芸術・技術の創造」と「芸術のための芸術の創造」と述べる。そして「生きるために必要な芸術・技術」を「藝医術(げいじゅつ)」と呼ぶ。この概念は創造へのあくなき熱意に裏打ちされたものであり、八幡氏の創作活動の源になっていることを実感するものであった。また、作り手側の意図を押し付けてしまいがちな映像というメディアにおいて受け手となる観客との相互作用のあり方についてあらためて考えさせられた。

参加者からは、「『なぜ3面インスタレーションなのか』といった疑問も〝解剖学的、という視点で考えると腑に落ちた」、「『医療』と『映像』のコラボという点が斬新に感じた」、「『空間』を重要視するという考え方が心に残った」などの意見が寄せられた。さらに質疑で交わされた「手食」と「アートセラピー」の親和性をめぐる論点も興味深いものである。

今後の課題と取組み：

映像を単体で見せるのではなく、周辺的な仕掛けを含めて総合的に観客自らがそれぞれ解釈することができるように表現するという八幡氏の手法・芸術観は、斬新かつ刺激的であった。そして、「様々な表現方法とのコラボ」によって映像の能動性を喚起させる狙いも「映像の可能性」を探求するうえで今後、さらに検討を重ねたい主題として認識できた。

研究会も発足から3年目に突入する。今後も様々な映像クリエイターを招き、それぞれの方法論や実践例を通して、映像制作の現状と課題を探ることを目指したい。

（たぶち としひこ／映像人類学研究会代表、桜美林大学）

メディア考古学研究会

福島 可奈子

メディア考古学研究会は、第3回研究発表会を下記の通り開催した。

日時：2024年7月13日（土）13:00～15:00
会場：板橋区立教育科学館2階・教材製作室
「たわむれるイメージ／GO STOP PROJECTION―エミール・レイノー生誕180周年記念」

第3回研究発表会では、アニメーション装置の先駆者エミール・レイノー生誕180周年を記念して、現代の若手研究者・若手作家4名（山端健志、野田大地、吉田航、かねひさ和哉）のメディア考古学的な「温故知新」の試みを取り上げた。研究発表会開催にあたり、事前に学会員への個別メールでの呼びかけやSNSでの告知も前回まで以上に活発におこなった結果、学会員・一般あわせて54名の参加があった。

発表1「プラクシノスコープ・ア・プロジェクションの再構築」（山端健志、板橋区立教育科学館／武蔵野美術大学）
発表2「日本画制作せず、日本画メディアを使う意識。」（野田大地、武蔵野美術大学／日本画作家）
発表3「線路のフレームレート」（吉田航、東京藝術大学／メディアアーティスト）
発表4「"漫画映画"ふたたび～個人制作による古典的アニメーション表現の再解釈」（かねひさ和哉、アニメーション研究家）

全体シンポジウム
コメンテーター：松本夏樹（大阪芸術大学／現存する日本最古のアニメーション発見者）
司会：福島可奈子（早稲田大学）

発表1では、山端健志会員（板橋区立教育科学館／武蔵野美術大学）が、エミール・レイノーが開発した特殊なアニメーション装置「プラクシノスコープ・ア・プロジェクション（praxinoscope à projection）」の再構築に関する発表をおこなった。本機は、投影レンズ付きプラクシノスコープと、既存のオイルランプに取り付け可能なマジック・ランタンを組み合わせている。それは水平走行の光学玩具による「動画」と、マジック・ランタンの「背景画」の映写が交差する、家庭用の反射映写式アニメーション装置である。山端会員は、本機の極めて特異な特徴を丁寧に解説するとともに、現在板橋区立教育科学館研究員として板橋区産業の特徴である「印刷」と「光学」技術にかかわる戦前の視聴覚メディアの調査、また武蔵野美術大学博士後期課程で「紙フィルム」研究をすすめてきた過程で、本機がそれらの技術的交点の装置であることに気づいたことについても言及した。また3Dプリンター等で本機の各部品を再現し、本機で楽しむことのできる新作のアニメーションも披露した。

写真１：発表1の様子

発表2では、日本画作家の野田大地氏（武蔵野美術大学）が「日本画制作せず、日本画メディアを使う意識。」というタイトルで、自身の作品群のコンセプトについて語った。野田氏はこれまで一貫して「日本画」を「現代アート」として転用する作品を制作・発表しつづけているが、その根拠が「日本画」という概念定義への違和感がもとになっていることを、自身の作品群の紹介等を通じて丁寧に解き明かした。また「日本画」という呼称が、明治期以降に「西洋画」が生まれたことに対抗してできた概念にすぎないこと、江戸期までの日本美術（大和絵・和画など）に比べ日本画が、伝統的な溶剤「メディウム」の刷新など実は前衛的な試みをおこなってきたことも明らかにした。それらを踏まえ、自身の「日本画」作品における前衛的意義についての表明をおこなった。

写真2：発表2の様子

発表3では、メディアアーティストの吉田航氏（東京藝術大学）が、自身のこれまでの作品と最新作『線路のフレームレート』（写真3の右側の作品）の解説をおこなった。吉田氏はこれまで映画発明以前における映像装置や視覚玩具の仕組みを独自に解釈しなおした立体作品の制作をつづけてきた。たとえば『動きの統計学』（写真3の中央画面）は、無機物である石に生命を吹き込む、立体ゾートロープ作品である。回転するテーブルに、様々な形状の石ころを立体配置し、ストロボの点滅によってアニメーションを生み出したことを動画などで解説した。また近年は、見立てによる日常の拡張への関心を強めており、会場展示をおこなった『線路のフレームレート』では、電車の先頭車両の視点であるモニター内のアニメーション映像が、鑑賞者の歩みと連動して風景が変わるように設定されていた。そのことにより、鑑賞者は自らの歩行速度が、モニター内では電車の速度に変換されるのである。吉田氏の本作の発想のもとはパラパラ漫画にあり、外的な身体と内的なイメージの連動がたえず模索される。発表後、参加者たちに本作を体感する時間をもうけた。それにより、それぞれがモニターの前を前進・後退することで、身体が電車化するメカニズムを体感した。

写真3：発表3の様子

発表4では、アニメーション作家・研究家のかねひさ和哉氏が「"漫画映画"ふたたび～個人制作による古典的アニメーション表現の再解釈」と題した発表をおこなった。かねひさ氏は、映像編集ソフトの普及が、フィルム時代の映像をノンリニア編集で模倣する試みをいかに可能にしたのかについて、自身がこれまで作ってきた、現代社会を昭和30年代から40年代のアニメーションで表現した作品を振り返りながら論じた。とりわけ2024年に自身がアニメーションを手掛けた、大ヒットのミュージックビデオ『はいよろこんで』（こっちのけんと）や、『もしも昭和30年代にiPhoneのCMが放送されていたら』等の作例を挙げながら、セルアニメーションの撮影処理、またアニメーションの古典的表現をデジタル環境下で再現する方法、またその試みのメディア考古学的見地における意義について語った。さいごには、山端会員とコラボレーションをおこなった「家庭トーキー発声カラー映画」の新作作品を披露した。これはかねひさ氏がデジタルツールでアニメーションと伴奏音楽の制作をおこない、山端会員がそのデータを紙フィルム化し、レコード盤化したものである。それを家庭トーキー発声映写機（写真4の中央の装置）にかけて上映する試みをおこなった。

写真4：発表4の様子

全体シンポジウムでは、報告者が司会をつとめた。今回の発表者の共通項である、過去の視覚メディア装置や技術的方法にインスパイアされて制作している点について、いつどのようなきっかけだったのか等について質問し、それぞれが過去の体験を踏まえて語った。また会場からは、「メディウム」の解釈に関する質問等が出た。発表者それぞれの解釈を述べるとともに、コメンテーターの松本夏樹会員が、「メディウム」という西洋の概念には、絵の具など媒材の意味から、古くは「霊媒（神と人とを結ぶ媒介者）」としての意味までを含んでいることなどを、メディア考古学・歴史学の見地から丁寧に解説した。

写真5：全体シンポジウムの様子

会場内には各発表者の作品をディスプレイしていたため、参加者には研究会終了後もそれらの展示を各自鑑賞してもらうことができた。様々な質問が飛び交い、今後に向けて大変発展性のある第3回研究発表会となった。

また、今回の研究発表会を機に、佐藤洋会員（共立女子大学）に当研究会の運営構成員として新たに加わっていただくことになった。また今回の発表・参加を通じて、自身の研究を学会でさらに深めていきたいと12月に入会したかねひさ和哉会員をはじめ、他にも入会希望者がいるため、順次手続きを進めていく。

本研究発表会のダイジェスト映像を、以下のURLで2025年2月1日以降に会員向け限定公開の予定である。また公開開始次第、メーリングリストでお知らせする。

https://www.youtube.com/watch?v=LOgoDPTbnmU

（ふくしま かなこ／メディア考古学研究会代表、大阪大学）

映像玩具の科学研究会

橋本 典久

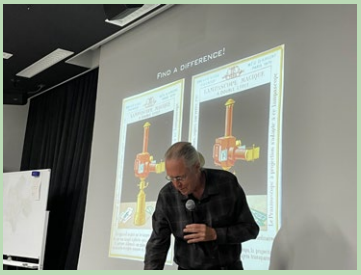
映像玩具の科学研究会 第三回「いわいとしお×東京都写真美術館　光と動きの100かいだてのいえ　―19世紀の映像装置とメディアアートをつなぐ」を科学する

　映像玩具の科学研究会は東京都写真美術館の企画展「いわいとしお×東京都写真美術館　光と動きの100かいだてのいえ　―19世紀の映像装置とメディアアートをつなぐ」にあわせて第三回目の研究会を開催した。岩井俊雄氏とエルキ・フータモ氏による熱のこもったレクチャーが行われた。

・日時　8月3日　14時から17時30分
・会場　東京都写真美術館学習室
・参加者　21名 (学会員、専門家、一般、学生)

進行
・あいさつ/参加者自己紹介
・岩井俊雄氏による展覧会解説
・会場に移動してのギャラリーツアー
・エルキ・フータモ氏による、ミニレクチャー
・移動して懇親会(希望者)

進行の詳細
・岩井俊雄氏による、専門家向け解説
　筆者と取り組んでいる19世紀の装置類の復元装置類について専門家向けの解説が行われた。ロジェの車輪の実験、ファラデーの輪、アノーソスコープ、プラトーのライトドローイングの実験などの詳細や装置制作における裏話などが紹介された。
・会場に移動してのギャラリートーク
　一般の来館者の方も含めた、ギャラリートークとして開催された。熱のこもったトークは90分に及び、作者本人からの解説に、多くの聴衆が惹きつけられていた。
・エルキ・フータモ氏によるミニレクチャー
　エミール・レイノーが制作したランパスコープ・マジック、ステレオ視ができるプラクシノスコープ、投影式プラクシノスコープ、テアトル・オプティークなどの詳細や研究内容が紹介された。世界トップクラスの初期映像装置コレクターでもあるフータモ氏のコレクションから、製造数がとても少ない珍品類も紹介された。
・追加のレクチャー
　フータモ氏は追加のレクチャーを用意していた。調査に10年かかったという、円盤状のフィルムに螺旋状に記録された映像を上映するスピログラフについての詳細、盛衰について紹介された。



参加者の感想抜粋

・エミール・レイノーとエルキさんと岩井さん、そして多くの映像技術発明者が時空を越えて語り合っているような、非常に刺激的な時間を体験させて頂きました。

・今回も、とても刺激を受けた会でした。とくに、スピログラフの研究発表が興味深く、投影も覗き見ることもできるというその装置の多義性に驚きました。動く映像の持つ、なにか根源的な感覚への刺激について考えてきたいところです。

・展覧会の内容が、第1回、第2回の研究会の内容とリンクしているところも感慨深いものがありました!取り組みがひとつひとつ繋がっていく感じ、深まっていくところが学んでいるな〜という充実感につながりますね。

・CCBTで時間層を見た時はディスプレイの走査に思い至らなかったので、岩井さんの解説を聞いて、そういうことだったのか!となりました。

・いまさらですが驚き感動します。前に人が歩いていないところを創意工夫で切り開いていく、その過程を今や絵本作家として関連づけ連続したストーリーにして語り、いわばこの日のギャラリートークは立体的な絵解きであり、絵巻物的パノラマの作品ともなっていたと言えましょう。大半は特色として、複数の人間が同時に体験できる、楽しめる、開かれた視覚作品。エルキ・フータモ先生は、最高の理解者として岩井さんの作家としての本質を、ポジティブ、好奇心旺盛、革新性と捉え、周人みなの共感を得ていたと思います。子どもたちとのワークショップからのフィードバックもあり、重要としていて、写真美術館には珍しく、たくさんの子どもたちが展示室をめぐり、それぞれの作品に見入る姿もよき光景でした。

橋本の感想

展覧会の企画段階から関わっていたため、専門家を対象にしたギャラリートークができないだろうかと考えた。岩井氏に打診したところ、快く引き受けていただくことができた。開会式と講演のために来日するフータモ教授にもミニレクチャーを依頼したところ、こちらも幸運なことに快く引き受けていただくことができた。詳細や構造をしらない装置がたくさん登場し、もっと調査研究、レプリカを制作して検証をしなければと強く思った。

次回の研究会

ステレオ視の研究の一環として、フレンチティシュー型のステレオカードを作成する研究会を2月に開催する予定。

（はしもと のりひさ／映像玩具の科学研究会代表、明治大学 ）

中部支部

齋藤 正和

中部支部では、2024年10月19日に第1回中部支部研究会と中部支部総会を名古屋大学にて開催した。第1回中部支部研究会では、2件の研究発表と1件の招待講演が行われた。

研究会終了後に、同会場にて中部支部総会を開催し、2023年度の活動報告及び支部予算に関する会計報告を行い、2024年度の事業計画案について確認し承認を得た。

＜第1回研究会概要＞

2024年度｜日本映像学会 中部支部｜第1回研究会

日時：2024年10月19日（土）（13:30 開始予定）

会場：名古屋大学大学 全学教育棟 本館北棟 406室

◎招待講演タイトル：

Shooting Mothers――ポスト・パンデミック時代の中国インディペンデント映画と新たな創造のプラットフォーム

要旨：

中国におけるメディアや芸術への規制が強化される中、かつて隆盛を誇った中国インディペンデント映画は、公的言説から排除され、その存在は非常に見えにくくなっている。しかし、そうした厳しい状況下でも常に創造の芽は育まれており、新しいプラットフォームや、これまでにない作り手が登場し、世代を超えた共創が活発に行われている。

本講演では、中国の老舗映像コレクティブ、草場地（Caochangdi）ワークステーション主催のオンライン映画祭「フィルム・フォー・マザー」に焦点を当て、パンデミック以降、インターネット上に築かれたプラットフォームにおけるユニークな制作と流通の過程を検証する。「母」をテーマにしたこの映画祭では、母と子、撮る者と撮られる者、見る者と見せる者が千変万化に交替し、融通無碍に交錯する。

特別ゲストとして、 同映画祭で高い評価を得た短編処女作『紅娣（Hongdi）』（2023/モノクロ/ 15分）の監督、楊眉（Yang Mei）氏をオンラインでお迎えし、上海の初老女性の婚活を描いた同作を上映する。[助成：JSPS 基盤研究(C) 23K00224]

ゲスト紹介：

秋山 珠子（あきやま たまこ）

神奈川大学外国語学部中国語学科准教授。1990年代初めより中国語圏の映画監督・美術家らと多く親交を結び、研究・通訳・翻訳を通して彼らの活動に伴走する。共著に『動物×ジェンダー―マルチスピーシーズ物語の森へ』（青弓社、2024）、『Chinese Cinemas in Translation and Dissemination』（Routledge、2021）、 共編著に『華語独立影像観察』1「特集＝現代日本と中国インディペンデント映画のコネクション(1989–2020)」（CIFA、2021）、訳書に『侯孝賢の映画講義』(侯孝賢著、みすず書房、2021）、字幕翻訳に『鉄西区』(共訳、王兵監督、2003)など多数。

◎研究発表（２件）

・セルフヒーリングのアプローチとしてのインディペンデント映画制作

（Independent Filmmaking as an Approach of Self-healing）

王 馨怡（ワン　シンイー）（金沢21世紀美術館）

要旨：

本研究は山岡瑞子の自伝的ドキュメンタリー映画『Maelstromマエルストロム』（2022年）に着目し、一人称視点を通して、9.11事件、東日本大震災、コロナ禍など混乱した大環境における事故、家族や友人の死、家の売却などの様々な出来事を乗り越え、自己救済(self-salvation)とセルフヒーリング(self-healing)の過程を描いた。健常者から障がい者への変化、および制御不能な災害を経験した後の記憶を整理しながら、個人の主体性を際立たせている。また、横断的に活動するアーティストとして、美術館やギャラリーという場を利用し、映画上映と映画に登場する絵画、写真、装置、日記などの作

品展示に結びつけている。こうした記憶の担い手である物事の物質性を強調し、観客は監督の数十年にわたる歩みを目撃する「証人」として、そのセルフヒーリングのプロセスを共有する。

・戦後日本、映像作品における風景の構築と転回
　―瀬戸内海を舞台とする作品を中心にして
　永井聖子（名古屋大学 人文学研究科 映像学専攻 博士後期課程3年）

要旨：
　今回の発表では、戦後間もない1950年代から1980年代までの瀬戸内海を舞台とする映像作品の中で描かれた風景に注目する。空間論を示したルフェーブルの例では、建造物などにより知覚される「空間的実践」、意図的に空間の役割を操作される「空間の表象」、日々を生きる人々の生きられる空間、メディアによるイメージをも取り込み構築されていく「表象の空間」を３つの空間の次元として提示した。しかし、戦後、映像作品のフレームの中で表現された風景には、これらの既存の空間分析のスケールでは捉えきれない社会的表象としての独自の風景が構築されているのではないかとの仮説を今回の発表では掲げ、その分析に挑むこととする。

　王会員の発表では、障がい者に関する法制度等の社会的・歴史的背景の検討、障がい者自身が制作した映像作品の紹介、さらに山岡作品におけるテクスト分析を通してこれまで障がいがどのように描かれてきたかについて考察が行われた。

　永井会員の発表は、瀬戸内海を舞台とする映像作品において描かれた風景に焦点を当てたもので、景勝地としての美観と公害問題という相反する言説、ならびにフレーム内で切り取られた「見るべき風景」としての表象と広く流布されるイメージとの関係などについて発表が行われた。また、風景をフレーミングする際のスポンサーとの関係性（意向・配慮）についても言及された。

　招待講演では、中国インディペンデント映画の概観に触れた後、中国の老舗映像コレクティブ「草場地（Caochangdi）ワークステーション」主催のオンライン映画祭「フィルム・フォー・マザー」に焦点を当て、その独自の制作および流通過程について考察された。また、母と子、撮る者と撮られる者、見る者と見せる者が様々に入れ替わることで、映画内に多様なヴォイスが現れていたことや、中動態としての映像表現の可能性についても言及された。
　さらに、楊眉（Yang Mei）監督の作品『紅娣（Hongdi）』（2023年/モノクロ/15分）を鑑賞し、オンラインでのディスカッションも行われた。上海の初老女性の婚活を描いた同作に対しての現地での反応や、映画内で用いられた方言の使用意図についてなど、活発に質疑応答がなされ有益な議論が行われた。

（さいとう まさかず／中部支部代表、名古屋学芸大学）

西部支部

趙 瑞

　西部支部では、例年8月に行っていた福岡インディペンデント映画祭との共催企画「夏の上映会」を、本年は同映画祭「FMF特集 ZERO Day」(8/31)の共催企画として開催し、さらに一週間後、同映画祭における特集プログラム「FMF特集」(9/2)として開催した。
　1970年代後半から福岡でスタートした自主映画の制作と上映を行うフィルムメーカーズフィールド(FMF)の作品と、その名物企画であるパーソナルフォーカスのアンソロジーを計16作品、また福岡出身で日本を代表する実験映像作家・伊藤高志会員の初期6作品を8mmと16mmフィルムで上映する大変貴重な機会となった。

福岡市美術館での上映後に伊藤高志会員とFMF主催者である宮田靖子氏、福岡FMF代表の山本宰氏が登壇しトークを行った。

（ちょう るい／西部支部代表、九州産業大学）

日本映像学会第 51 回全国大会 第二通信

大会実行委員会

I. 大会概要

1. 会場：神戸大学六甲台第2キャンパス（初日のシンポジウムは神戸大学百年記念館［神大会館］、懇親会は瀧川記念学術交流会館、2日目の研究発表は農学部の各教室）

2. 会期：2025年5月31日(土)、6月1日(日)

3. 大会テーマ：「震災・映像・アーカイブ」(仮)

4. 大会プログラム(予定)

2025年5月31日(土)

・開会
・山口誓子記念館および神戸大学百年記念館1階展示ホール見学
・シンポジウム
・懇親会

2025年6月1日(日)

・研究発表
・作品発表
・理事会
・第52回通常総会
・閉会

※大会プログラムの詳細については，大会ウェブサイトおよび「第三通信」(2025年5月初旬発行予定)でお知らせいたします．

5. 大会参加費

- 会員 3,000円
- 学生会員/一般/一般学生 1,000円

(上記参加費で両日とも参加可能)

6. 大会参加を希望される方は，大会ウェブサイトの「大会申込」フォームより申し込みください．大会参加の申し込み期限は，2025年5月9日(金)です．

II. 研究発表 / 作品発表 申込要領

1. 研究発表 / 作品発表の申込資格

2024 年度在籍会員（会費未納・滞納者は除く）

2. 研究発表 / 作品発表の申込方法・期限

- 大会ウェブサイトの「発表申込フォーム」より申し込み下さい．申し込み後，受領確認の自動メールを差し上げますが．メールが届かない場合は必ず問い合わせ下さい．
- 「発表申込フォーム」の送信には，発表概要等を記述する，指定のファイル(Microsoft Word形式)が必要です． このファイルは大会ホームページからダウンロードできます．
- 大会ホームページからダウンロードされた指定のファイル(Microsoft Word形式)以外の申込みは受け付けません．
- 必要事項に不備のある場合や，申込資格のない場合は無効となります．
- 発表概要の字数は，800字以上1,000字以下です．また図表/図版/画像等を挿入する場合は，600字以上800字以下となります．
- 上記の申込によって提出された「発表テーマ」や「内容」については，下記「II-3 発表申込の審査」のとおり，厳正な審査と理事会の審議を経て，大会実行委員会が正式に受理した後に，原則として概要集にそのまま掲載されます．それらを前提に原稿を作成して下さい．
- 画像等に著作権が関わる場合は，必ず許諾を受けてください。また，引用元などの明記に関してもご注意ください．
- なお，日本映像学会の既存の研究会は，大会の研究発表 / 作品発表を申請することはできません．各研究会活動は大会以外の活動の中で行ってください．
- 申し込みが多い場合には，理事会によって抽選となる場合があります．
- 発表の申込期限は，2025年2月13日(木)とします．

3. 発表申込の審査

- 上記 II-2 に従って申し込まれた発表は，日本映像学会理事会(2025年3月16日開催予定)において厳正な審査を行い，承認を得た後に，大会実行委員会が正式に受理いたします．
- 受理に関しては，申込対象者に別途お知らせする所定の期日までに，
  ①入会手続きや会費納入を完了する．
  ②理事会の所見をふまえた概要の再提出をする．
  のような(条件付き)受理も含みます．条件を満たさない場合，受理は取り消しとなります．
- また，下記の注意事項にも留意してください．
  - 必要事項に不備のある場合は，無効となることがあります．
  - 発表内容やテーマが，学会の趣旨にそぐわない場合や，技術的な理由で対応できかねる場合は，ご相談の上お断りすることがあります．
  - 日本語の形式も審査の対象になります．
  - 提出された発表のタイトルおよび内容を，申込受理後に変更することは原則としてできません．

III. 研究発表 / 作品発表について

1. 発表時間

- 研究発表 / 作品発表の時間は25分，質疑応答は5分です．

2. 使用機材

- 研究発表 / 作品発表にあたっては，持参したノートブックコンピュータから，発表会場のプロジェクター / スピーカーへの接続が可能です．
- また各会場には，Blu-rayプレイヤー(DVD-Videoも再生可)が設置されており，映像や音声再生に使用できます．
- 会場のプロジェクター / スピーカーへの接続には，HDMI端子が利用可能です．
- 映像の出力にはD-sub端子も使用できますが， その場合別途音声ケーブルが必要となり，接続にはRCAプラグ(ステレオ)を使用します．
- 映像 / 音声の出力に変換コネクター等が必要な場合は，各自持参してください．
  - 映像の出力解像度は1080p30(FPS)まで，音声はステレオ再生が可能です．
- 発表において，会場に備え付けられた機材以外を希望される場合には，原則として発表者にご用意いただきます．

発表会場の設備機器

- プロジェクター(天井) / スクリーン
- アンプ / スピーカー(天井)
- Blu-rayプレイヤー
- マイク(有線 / 無線)
- 映像 / 音声入力パネル(HDMI / D-sub / RCAプラグ[ステレオ])

- 発表形式や方法について，個別のケースがある場合には事務局までご相談ください．
- 配布物がある場合には，各自ご用意ください．

Ⅳ. 会場へのアクセス

大会会場へのアクセスは，下記リンクをご参照ください．

- 神戸大学六甲台第2キャンパス(大学HP)
  http://www.ans.kobe-u.ac.jp/nougakubu/access.html
- 以下の地図中の100番が初日シンポジウム会場の場所です．
  隣にスターバックスが土曜日のみ開館しております．
  https://www.kobe-u.ac.jp/ja/campus-life/general/access/rokko/rokkodai2/

会場： 神戸大学六甲台第2キャンパス（〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1）

神戸大学百年記念館（「神大会館」：初日のシンポジウム会場）

瀧川記念学術交流会館（初日の懇親会会場）

研究発表および作品発表は農学部棟の各教室を予定

アクセスは下記のURLをご参照ください：

http://www.ans.kobe-u.ac.jp/nougakubu/access.html

日本映像学会第51回全国大会実行委員

委員長　板倉史明（神戸大学）
副委員長　桑原圭裕（関西学院大学）
委員　東志保（大阪大学）
委員　大橋勝（大阪芸術大学）
委員　北市記子（大阪経済大学）
委員　木下千花（京都大学）
委員　田中晋平（日本大学芸術学部研究員）
委員　中村聡史（日中文化芸術学院）
委員　橋本英治
委員　八尾里恵子（甲南女子大学）

以上

（いたくら ふみあき／日本映像学会第51回全国大会実行委員長、神戸大学）

実行委員会事務局は以下の住所です。

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1-2-1
神戸大学国際文化学研究科　板倉史明宛
（＝日本映像学会第51回全国大会事務局）
大会ウェブサイト：http://jasias.jp/eizo2025
メールアドレス：kobe-convention51@jasias.jp

協賛（一般財団法人神戸観光局）神戸コンベンションビューロー

FROM THE EDITORS

編集後記

総務委員会　常石 史子

会報202号をお届けいたします。今号は学会組織活動報告を主とする号で、二つの委員会、七つの研究会、二つの支部から報告が寄せられ、充実した活動の様子が伝えられました。カラー図版を豊富に用いた報告も多く、長さも団体によってさまざまで、PDFによる電子版という、本会報の自由度の高い発行形態が十全に活かされていると感じました。

冒頭の「VIEW展望」欄は平野共余子会員にお願いしました。ニューヨークのジャパン・ソサエティにおいて、18年の長きにわたりプログラミングに携わられ、アメリカにおける日本映画紹介に多大な功績を残されたことは周知の通りです。今回は、氏が渡米される以前に留学されていた旧ユーゴスラヴィア地域を中心に、留学当時から現代に至るまでの同地の映画との関わりを綴ってくださいました。思いがけない映画やテーマが少しずつ重なりながら連なって、さながら氏のプログラミングのすぐれた手腕を紙面に見る思いです。

今号が発行されますとまもなく、第51回全国大会の研究発表および作品発表の申し込み締め切り日を迎えます。阪神淡路大震災から30年という節目の年に、そして昨年の能登半島地震の爪痕がいまだ生々しく残っているこの時期に、「震災・映像・アーカイブ」を大会テーマ（仮）とし、神戸大学を会場に全国大会が開催されることには大きな意義があると思います。個々の発表や研究内容は震災と直接関わるものでないとしても、映像に関心をもつ者である以上は誰もが、それぞれの問題意識を持ち寄って集うことのできるテーマではないでしょうか。大会実行委員長の板倉史明先生をはじめ、委員・関係者の皆さま、引きつづき、どうぞよろしくお願い申し上げます。

（つねいし ふみこ／総務委員会、獨協大学）